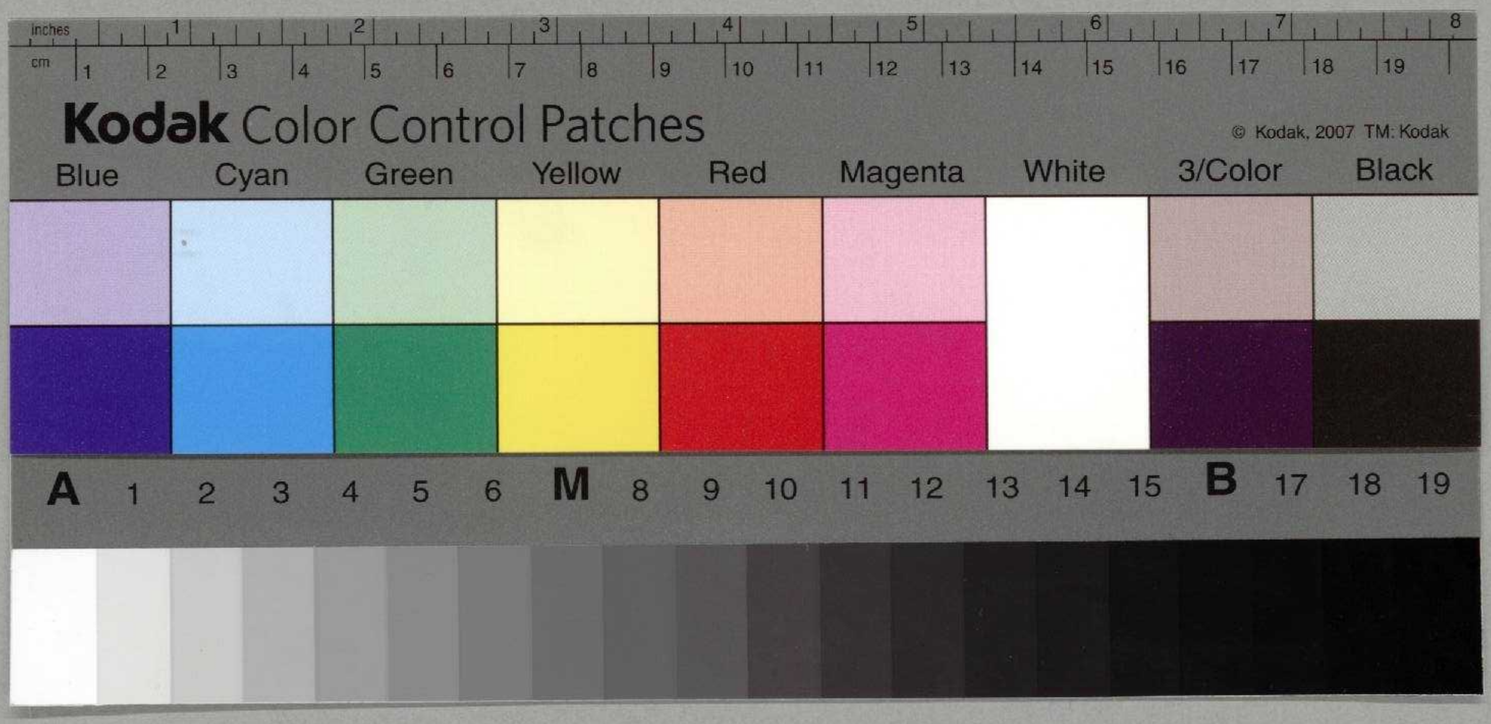
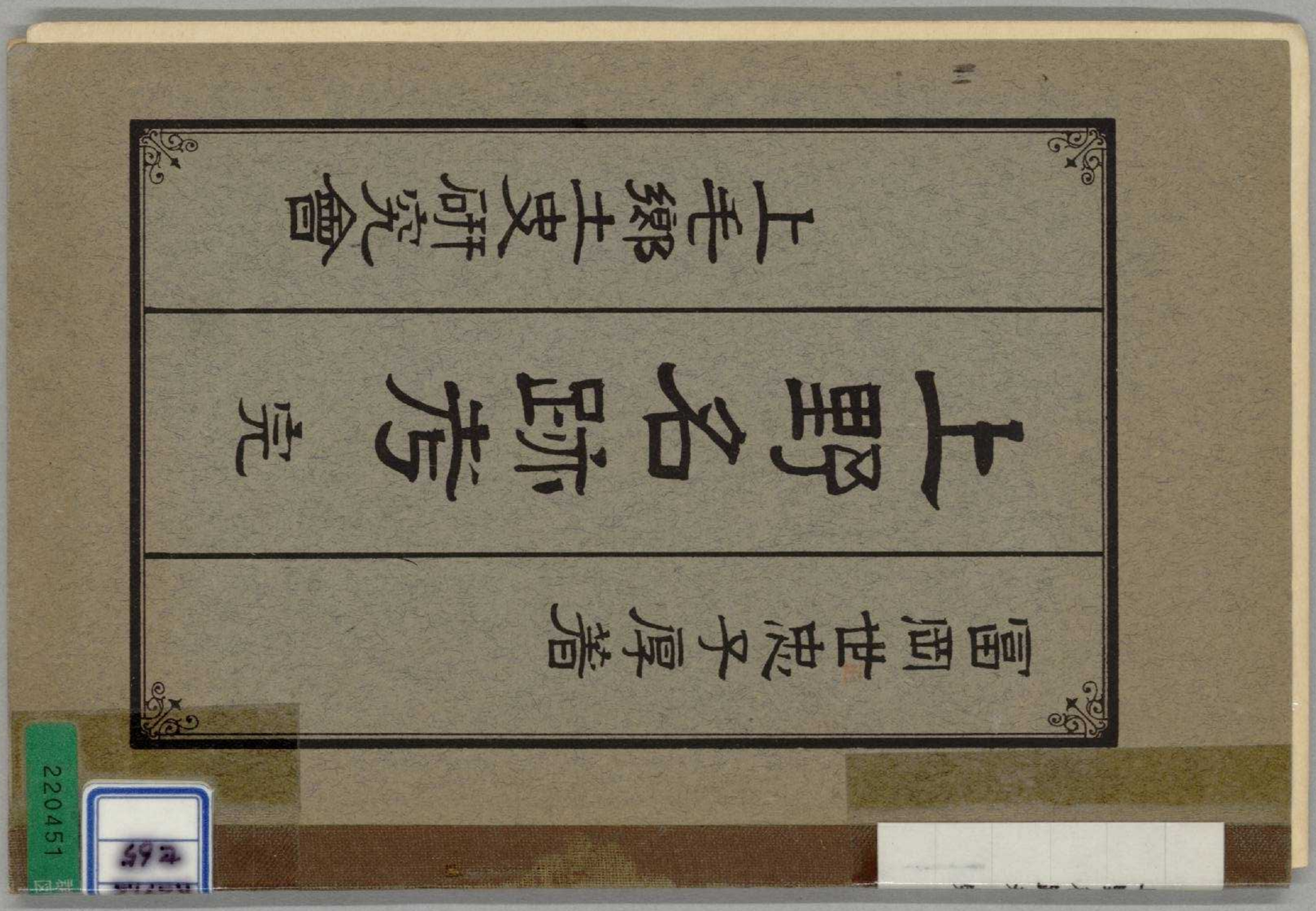




富岡世忠子厚著

上野名跡考

完

上毛鄉土史研究會

220451

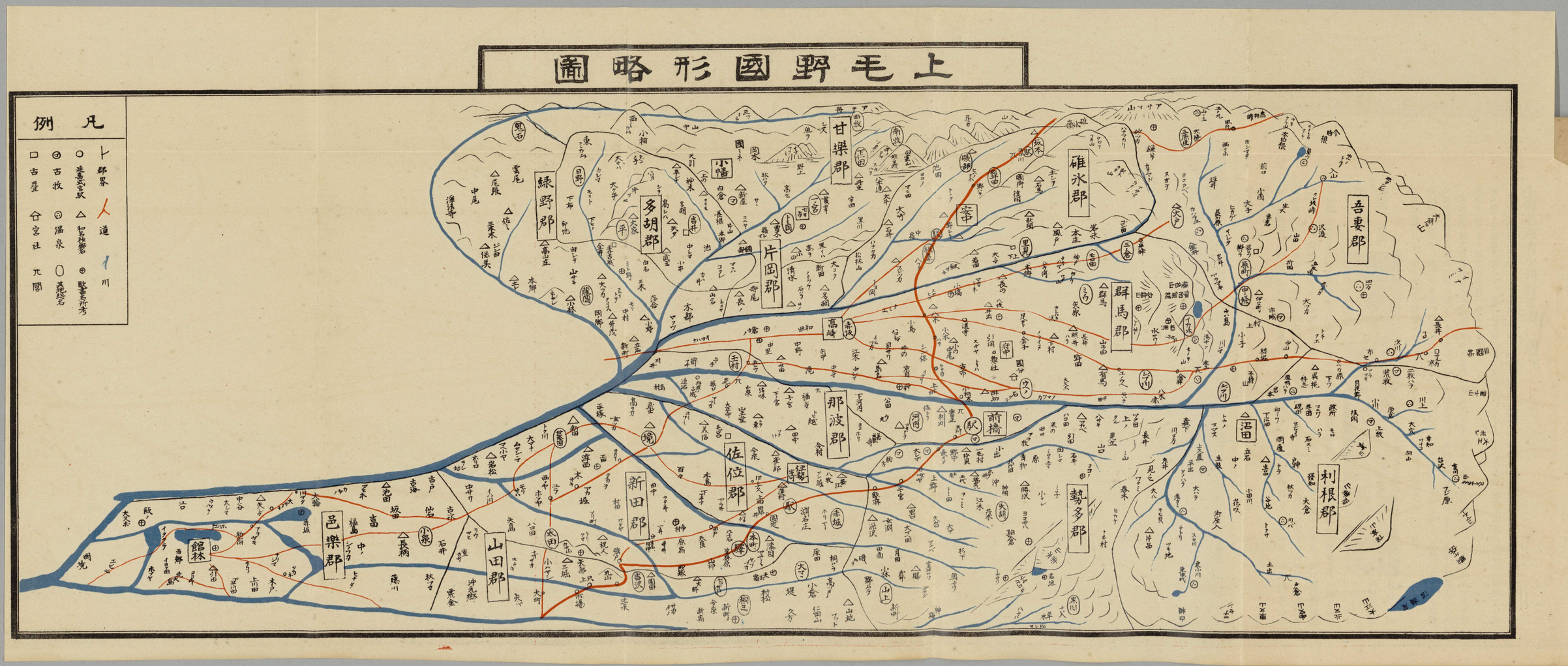
K291.2
T65

上野名跡考

富岡世忠子厚著

完

上毛鄉土史研究會


上毛野國形略圖
凡例
郡界
道
川
延喜式官駅
知名秘鑑
歌書名所考
古牧
温泉
其他総名
古墨
宮社
丸閣
緑野郡
多胡郡
甘樂郡
片岡郡
碓氷郡
吾妻郡
群馬郡
那波郡
佐位郡
新田郡
山田郡
邑樂郡
勢多郡
利根郡
沼田
館林
小幡
高崎
前橋

上野名跡考を刊行するに就て

上野名跡考は我が上毛の歴史、地理に關する舊書中に於ては一番後代の新著である。故に比較的誤謬も少なく餘り冗漫にも渉らず、簡にして要を得て居るものてある。その著述の年代は文化六年已己の仲秋て、今大正十四年より百十七年前の事てある。

著者富岡正忠は高崎藩大河内侯の家臣て諱は正美後に正忠と改めたが通稱は藤九郎、邑樂郡小泉城主てあつた富岡對馬守秀高八世の孫てあると云ふ。幼より學を好み、和歌を嗜み國學に長じ、古事に精通して居た處から文化六年の秋、五十歳の時に本書が成つたので、根據を萬葉や古今集等に採り、本州の古書にも相當に考證稽查して、最も愼重の態度を以て筆を執られたことは、今更ら言ふ迄もないことだ。

高崎市の山内留彌君所藏

著名　富岡正忠氏筆蹟

本書の底本は高崎市史編纂主任山内留彌氏所藏の本を前橋圖書館司書佐藤錠太郎氏の謄寫したものを以て之に充てた。同書は寫本中の優秀なるもので、著者の手澤だと稱せらるゝ程の善本てある。更に篤學家早川圭村翁が、嘗て倉賀野の國學者田口貢翁より讓られた本を借りて對校し、又此本を廣澤加茂神社々掌前原寛臣氏が借寫し、心づいた誤謬などを校訂したものをも借覽し、彼此對照校讐して後、始めて印刷に附したのてある。

本書の標題は上毛名跡考と云ひ、上野國名跡考とも書し、上野名跡考とも筆し、一書中に三通りに書いてあつた。併し凡例や目次中には上野名跡考と署してある。又世間でも既に上野名跡考と稱して居る。蓋し稱呼の音便も一番之が好いやうに思はれる。故にこれを以て定名とすることにした。

本書刊行の動機は、昨大正十三年一月始め、上毛考古會の新年會を前橋市の臨江閣樓上で開いた時、山内氏が此の「上野名跡考」を出品された。之を一覽した會衆は殆ど申合せたやうに、異口同音に本書の刊行を企望された。或人の如きは謄寫版でも好いから同志を募つて五十部でも百部でも印刷しては如何とまで熱望されたことてある。其際、吾等に於て引受け、遠からざる將來に於て印刷に附すると云ふことに成つて居たのてある。斯うした經歷て、甚だ延引乍ら、茲に刊行するに至つた次第である。

大正十四年八月

豐國覺堂 敬識

上野名跡考序

夫我日本、稱二大國一者三。上總也、常陸也、次爲二上毛之國一。其地於二山東之域一、尤爲二首領一。上古草創之時、豐城王里二于此一、管二領山東之諸國一、以鎭二東奥一矣。王之孫御諸別、亦封二于茲一、子孫滋蔓二於東國一。倭武征東、亦凱二歌于此地一。景行入二東海一、柴二於堤野一、以還二於伊勢一。承和阿保、始爲二大守一。爾來親王、夾二在此國一、他人不レ得レ封レ此。貞觀忠良爲二國宰一、於レ今國民、慕二其政一。光孝初封二于此一、終登二帝位一。源賴信行二國務一之日、誅二忠恒一、大顯二武功一。義貞起二義兵一、勇名輝二燒季一。謂其國體、則平原廣衍之地、其位背レ陰向レ陽、群山圍繞、後榛岳爲レ鎭、利根三阪、吾嬬之衆巘、亦其北雄峙。前武總之廣原、遙續二東海一。爲二州之南畔一、有二廣沼平田一。赤城爲二東塞一、山勢連二野奥一、中間有二荒一。會津之嶮一。碓日爲二西塞一、信峽在二其西南一。上見二淺間一、荒船開二府於群馬郡一、他郡列岳、其左右壁立。中央帶二刀禰川一、重レ之以二吾嬬川一。烏川、神流川、渡瀨川、衆流合一、爲二刀禰川一、朝宗歸二東海一。其山川之形勝、土地之秀異、甲二于阪東諸州一、在二關左之上流一焉。赤城、榛名、白雲、拔鉾、之神廟、十二社之宮殿、是鬼神之所二守護一也。其土產之美好、有二絹布、麻苧、紙、漆、牛皮、鹿革、櫪子等之貢一。水甘土厚、沃野千里、其繁榮之

越二他境一殆如レ此。嗚呼、居二于此土一者、不レ可レ不レ知者也。唯恨、霜雪疾降、嚴冬寒、仲春風烈、而華遲。傳云、治承之兵火、國廳廢亦可レ歎哉。爾來五二百有餘年一于茲、且永享・嘉吉之禍亂、永祿・天正之攻戰、官驛・山林・祠廟・寺觀之舊跡、掃蕩幾盡矣、天運之循還也、亂極爲レ治。方今偃レ武修レ文者、殆三百年。枕レ臂以到二語レ古終及一レ國事一。先有二風土記一。國史之撰一。余亦志二于此一十有餘年一。編成是名二上野名跡考一。元家貧大典無二可レ徵者一。唯讀書之餘力、取二座右之小說一以成レ之。若夫所レ錄之得失、後人必能觀而正レ之則可爾。

文化己巳仲秋

上毛野州高崎　鳥見正忠子厚　誌

上野名跡考凡例

一、此編作例、一に信濃地名考にもとづき、且つ上野風土記抄・並郡村故事・同上野國志・沼田記・前橋風土記・高崎志・館林記等の諸說を拾ひ、その疑しきは是を里老に問ひ、且古史に渡りて、つとめて玆にことのみやびなるものをとる。

一、上野名所をよめる歌三十七首、並名所を附する歌九首あり、右は土人の說により、且代々の集に正してこゝに載す。

一、郡縣の方位並次序は、和名抄の例に隨て、烏川より西五郡を先とし、碓氷、片岡、甘樂、多胡、緑野　中央三郡を其次とし那波、群馬、利根川より東六郡を亦其次とす　利根、勢多、佐位、新田、山田、邑樂　但和名鄕名はこの限りにあらず。

一、神社は延喜式神名式を先とし、式外並今世の神祠を次とし、社祠の二字に分つ。

一、官驛の行程は古制にしたがひ、六丁を以て一里として、其大略を附す。

一、每郡姓尸は、ひとへに上毛郡村の記・姓氏錄・日本紀・續日本紀等の姓を探て此に附す。然れども千とせの今に至て、上古の姓氏詳にいひかたし。且豐臣氏、天下を取て、郡縣盡達す。今その一二を擧げていはゞ、碓氷郡磯部は石上部也。又坂本は坂本公。勢田郡の女淵は、南淵の姓抔いふが如し。又餘戶神戶・などの名は、戶部の轉じたるなるべし。（上古は山部、川部などゝ、部を分ていはれしこと多し。）

一、和名抄、鄕名存せるものあり、廢せるものあり、既に廢て庄或は村名に遺るものあり、其中邂逅（タマサカ）遺れるものを、玆にかいつけて、後人の補を以てしら玉の露としみがきなば、鞆田の苗のむらなへも、言は定てよかるべしと、比刀禰河泊の、ひとへに是がたすけを待つものならし。

上野名跡考目次

上編

一、上野國形
一、和名抄上野國郷名九十有八考
一、國郡名義並鄰近地名考
一、總考
見二于五郡上巻、四郡中巻之上、二郡中之下巻三郡下巻、毎郡附二姓名一。
一、毎郡神社佛閣故城舊壘附
一、延喜式官驛四郡碓氷、群馬佐位、新田共五驛

中編

一、碓日坂同山
一、石部里
一、白雲山妙喜社
一、一宮貫前神社抜鉾の考、とみの岡部
一、みどり沼綠野寺
一、鞘田
一、車里川
一、島の萩原
一、國府官廳
一、伊賀保神社椿名神社等說
一、物聞山
一、淺間嶽
一、神廟
一、手兒呼坂坂本姓
一、横野
一、あらふねの御社
一、多胡入野同嶺、八束山、多胡庄
一、多胡碑
一、佐野舟橋の說、中川入江、みわか崎
一、八坂井堤野、八坂神社
一、原の池
一、安蘇山安曾末里村
一、榛名神社
一、若伊賀神社
一、草津湯
一、百合若の說學校
一、彦狹島王の塚臺が松
一、あらふねの池
一、小野
一、七曲松
一、倉下

六

一、針原野
一、上野駒牽馬寮式九牧
一、伊加保根いかほかせ沼
一、黒髮山
一、子持山
一、四萬ねの御湯

下編

一、力禰河泊
一、赤木山
一、よこ野
一、長樂寺園田館
一、大荒木社
一、ひとね川
一、石垣沼澗
一、新田山小新田山毛流山
一、可保夜沼かほよの崎
一、延喜式諸貢物
一、久呂保の根呂
一、赤城神社加良社の說
一、えたの池
一、伊奈良沼

上野名跡考（上）

上野國群馬郡防人　富岡正忠撰

總考

萬葉十四　可美都氣努麻具波思麻度爾安佐日左指麻伎良波之母奈安利都追見禮婆

古事記曰、天菩比命之子、建比良鳥命之條。自註、此出雲國造・无邪志國造・上菟毛國造・下菟毛國造・伊自牟國造・津島縣直・遠江國造等之祖也、云云。

按に、倭名抄、上野國綠野郡郷名土師。姓氏錄、土師宿禰者天穗日命十二世孫、可美乾飯根命之後也、云云。舊事紀曰、上毛野國造、瑞籬朝皇子、豐城入彦命孫、彦狹島命、初治二平東方一十二國爲レ封。亦上毛野・下毛野難波高津朝、元毛野國、分爲上下、云云。

風土記抄云、上毛野・下毛野者、兩國中間、有二二野一、曰二佐野一、曰二笠懸野一、其間有レ川、曰二渡瀨一、又有レ川曰二佐野中川一、以二渡瀨一爲二兩國境一云々。この說蓋是に起る。

日本書紀曰、崇神天皇元年、妃二紀伊國荒河戸畔女遠洋年魚眼眼妙媛一。一云、大海宿禰女、生二豐城入彦命・豐鍬入姫命一。同四十八年四月、以二豐城入彦命一、令レ治二東國一、是上毛野君・下毛野君之始祖也と云云。

按に、是上野國造の始なるべし。亦十二代景行天皇の御宇には、武内宿禰を北陸東方の諸國に遣され、其國地形百姓の消息を察せしめ給ひ、其擊べき事を知召れ、日本武尊に命じて征伐し給ひ。又五十三年には天皇自ら伊勢に幸し、轉て東海の諸國に入給ふとかや。同五十五年には、彦狹島王を以て、東山道十五國の大都督に拜せらる。然れども病にて薨じ給ひしかば翌年秋八月親王の子、御諸別王に詔して、東國を領

せしめらる、玆に御諸別父王の業を行ひ給ひて、早に善政を得給ふとぞ。時に蝦夷騷動して亂をなせしかば、兵を擧げて擊たまふに、其酋帥足振邊大羽振邊闇男邊等、叩頭して罪を受、盡く其地を献りしかば、是より東國無事にして、王の子孫、今に東國にありといふ。是亦後世管領職の始なるべし。十三代の成務の朝には、國郡に立レ長、縣邑に置首、即取二當國幹了者一、任二其國郡首長一とかや。又同五年には、諸國をして國郡に立二造長一、縣邑置二稻置一、賜二楯矛一以爲レ表、隔二山河一而分二國縣一、隨二阡陌一定二邑里一とも見へたり。十八代履中の御世には、國史を諸國に置て言事を記し、四方の志を達せられ。三十五代舒明の御宇には、上毛野君形名を以て將軍として征二蝦夷以上日本紀に出四十二代文武の朝には、遣二多治比眞人三宅麿于東國一、巡二省政績一といふ。四十三代元明帝和銅元年、始めて從五位上田口朝臣益人、爲二上野守一、同二年平群安麿爲レ守今年甲斐・信濃・上野等七國を徵發して、蝦夷の備にせらる。同四年、多胡郡を置れたり。同六年、詔二天下諸國一、作二風土記一とも見えたり以上續日本紀に見ゆ四十四代元正帝養老三年七月、武藏守正四位下多治比縣守、管二相模・上野・下野一とかや。四十七代廢帝、天平寶字八年八月、橘錦裳を員外の介となさる已上續紀其後淳和天皇天長三年九月、上總・常陸・上野を以て、親王の任國とせらる。かくて御身は京にまし〳〵、介國務を行ふとぞ。承和・阿保親王大守と成、貞觀・忠長親王この國に到り給ふとかや。思ふに上野の郡縣十四に定りしも、和銅の分堺より成べし。今玆にその十四郡なるものをわかち、且は代々の歌集に基づき、是が名跡をたづねしるしぬ。已上、續日本後紀、文德實錄、三代實錄等の說

延喜民部式上野國大管郡十四　行程、上二十九日、下十四日

○碓氷郡　領鄕　七今統村若干下同　○片岡郡　領鄕五　○甘樂郡　領鄕十三　○多胡郡　領鄕七
○綠野郡　領鄕十一　○那波郡　領鄕七　○群馬郡　領鄕十二　○吾妻郡　領鄕三
○利根郡　領鄕　四　○勢田郡　領鄕九　○佐位郡　領鄕　七　○新田郡　領鄕五
○山田郡　領鄕　四　○邑樂郡　領鄕四

延喜兵部式並和名鈔等に見へたる上野官驛五つ

○坂本兵部式　○野後上に同じ、已上皆碓氷　○群馬和名抄利刈　○佐位和名抄淵名　○新田和名抄淡甘

官道圖

（覺堂曰、原本には別に地圖を附せられたれど、今は便宜の爲め始めに添付せし上野國形、即ち地圖中に之を配入したれば玆には省きぬ。尙ほ驛々に朱線を引きて連絡を示したれど是をも略することゝせり）

信濃國佐久郡長倉驛

延喜式、長倉驛・長倉神社・長倉牧見えたり。今ともに廢す、東鑑、仁治二年三月、海野幸氏と武田光蓮と、上州三原庄・信州長倉保の境爭論の事見えたり。今の沓掛かの驛の遺名也といへり。

碓日坂

自二長倉一玆にいたりて凡九里許。太平記、新田義宗と尊氏と合戰あり。甲陽軍鑑、板垣信形と上杉衆との戰ありし古戰場なり。

日本紀、日本武尊・東夷を平げ、常陸より甲斐に至り、武藏・上野をへて西方碓日坂に逮ぶと云々是也。亦上毛防人他田部子盤前が、古鄕遠からぬ碓氷を越えて作る歌、萬葉集卷十四、上野國防人部、領使大目正六位下上毛野駿河が、進歌のうちにあらはれたり。令の義解に、坂東とは箱根より東をいひ、山東とはこの坂より東をいふと見えたり。絕頂に熊野の御社あり、是より信濃の堺とす○世にいふ、多田攝津守殿の臣に、碓氷荒太郎橘貞光てふもの、此山中に住りなど、今も山の東に其の小祠あるは、後人の僻事なるべし。宇治拾遺の物語にも、今はむかし平貞道・平季武など見へて、碓井・卜部などの號見えず、姓氏錄にも笛吹連の尸は見へたり。攝津守源賴光・淸和天皇三代孫滿仲朝臣子也。冷泉院判官代、上總介。伊勢・攝津・但馬・備前・美濃・伊豫等轉任と云々。

古歌　白妙に降しく雪のうすひやま夕越くれはしかも道あり。　定嗣

上野國碓氷郡坂本驛

自碓氷嶺凡十五里許也。

延喜式、坂本驛馬十五疋と見えたり。姓氏錄、上毛野坂本朝臣、豐城入彥十世孫、佐太公之後也と云々。

○倭名鈔、碓氷郡　鄕名七　飽馬安木末、今秋間存　石馬　坂本佐加毛土、存　礒部伊曾倍、存　石井伊波井、岩井、存　野後野尻、存　俘囚廢

按に、飽馬は今の秋間三村ある是なるべし。東鑑飽間と出。太平記に飽間とよむはあやまり。　石馬廢、今飽馬につゞきて後閑土鹽など有て、此邊山の谷につゞけば石馬もし岩間などの義に通ひて此邊にや。亦

郷原村などあればいづれか詳ならず○磯部は石上部の一字を省しなり。續日本紀天平勝寶元年五月、上毛野國碓氷郡人外從七位上、石上部君諸弟に授二外從五位下一云々。又同五年七月、左京人正八位上、石上部君男島等四十七人、上毛坂本君姓を賜りし事を、訴る由見えたり。

東鑑曰、正治三年四月、越後國住人城小太郎資盛、企二叛逆一振二猛威一、時、佐々木三郎兵衛尉盛綱法師西念、有二上野國磯部之郷一被レ仰二彼者一可レ誅二資盛一之旨、付二飛脚一遣二御教書一、折節西念在二門外一、乍レ立拝二見之一不レ能レ入二門内一、取二所レ立門傍之鞍馬一乗レ之、揚レ鞭馳二向越州一平レ之云々。佐々木系譜に、磯部左衛門尉秀忠盛綱惣領、信實が子也と見えたり。此地に出たるべし。○石井廢今の岩井村是なるべし。上古石岩磐等の字、皆通用すればなり。

○俘囚廢詳かならず。此名、緑野・多胡の兩郡にも見えて、和名ともに闕たり。東宮切韻云、囚繫二禁罪人一也。一云、人を囚て在レ獄也と云々。獄令云、凡囚當レ處長官、十五日一たび檢行せよと云々。又獄囚有二疾病一者、主守申牒、判官以下、親驗二知實一、給二醫藥一救療せよと云々。いにしへ罪人置かれたる地なるべし。和名抄、播磨國郷名、夷俘あり。蝦夷・新羅などの俘置れたる地なるべし。延喜式、上野俘囚料一万束と見えたるは、是が料なるべし。

野後（ノジリ）のうまや　自坂本凡二十七里餘。兵部式、傳馬、碓氷五疋と見ゆ。今傳馬てふ村あり。是らや其遺名ならんか。和名抄、野後郷、また此地也。延喜式、野後驛は上野尻・下野尻等の村あり。太平記、瓶尻と云もこの地か上野板鼻といふ處にて宿をかり給ひしに、あるじの留守なるよし、女房のこゝろにて聞えければ、色をも香をも知る人ぞしると佗給ひぬ。女房是にめでゝ、宿をかしけるといふ（略）、夜半ばかりに、芦の葉つけぬる、淺黄のひたゝれ着たる男、かへりてこの旅人をとがめしに、女房ありし言葉をかたる（略）、此とき互に名乗あひて、伊勢三郎義盛とは是が事なりと云々。今の板鼻其地なるべし。國史云、伊勢三郎江良盛、上州碓氷郡板鼻邑人也、其父勢州人也。或云、從二勢州一來、居二干荒詩鄉。一或云、松井田邑人也。今伊勢三重郡福村出生地と云。

○八幡村八幡社　社領百石、別當神德寺、社家十七家　村上天皇天德元年、鎮座とかや。舊記に云、八幡太郎源義家、奥州初度軍の時、軍勢催促のため、上野國府止宿。板鼻八幡・赤坂社等奉幣ありと云々。赤坂社今高崎にあり。上古板鼻より小壕村にかゝり國府に通じて是官道なるべし

則利驛の驛に至る今ほ安豆末道といへり。○ついていふ。すべて地名には上古の人の姓氏多し、いはゆる磯部は石上部君の如し、坂本・豊岡・池田等、皆姓なるべし、常木は常世、安中は安倍小中原などかさねたるべし。野殿は殿來の姓、大竹は武部、高別當は後部高などなるべし（以上、碓氷郡地名）

○小壕村雁子社　又雁内子に作る　所祭稻荷と云　歌書・宇奈比古乃原、此地にや雁子と云字奈比古と云音近し、凡此邊からす川をわたりて、小壕・大八木・中尾・日高・古相木より實政にわたりて、今に東道とよぶ。群馬郡の國府は、此地より四里斗上にあり六帖未勘名にしおへばいづれもかなし朝な〳〵なてゝおふしゝうなひこがはら　山上憶良

○倭名抄群馬郡郷名十二　長野奈加乃　井出存　小野乎乃　八木止加利、大八木、小八木の二村存　上郊加無佐土　畔切安木利　島名之乃奈　群馬

桃井毛々乃井今山子田と云　有馬安利　利刈止加利、雁橋存　白衣東鑑、白井に作る、白井存

長野　歷て今本郷あり。東白河郷といひ、南に新波・我峯（ワガミネ）・小壕等の村ありて、此邊長野堰あり、又長野郷ともいへり　世にいふ長野堰は、みのわの城主長野氏の時、ひらかれたりし時、浦時になれり。この野は秋の霜をあらそひし戰場、いまだはらはずして夜をかさぬなど、北國記行に見えたるも、この地なるべし。按に、この堰は上は我峯より出て、下は倉賀野に落合、然れば其頃箕輪の用水にあるべくもなく、夫れより前、猶この堰はありしなるべし。神無月廿日餘りに、かの國府長野の陣所に至○小野　廢　今小野子村ありて伊香保の東北にあたる。然れども小村にて殊に偏境也。按に、今中尾村・鳥羽村などの地なるべし。小野に上中下の部を、分ていひけんを、後に中小野とし、又野の字を省しより、中尾と轉じたるにや小の字を尾とせしは、太平記、小幡を尾幡と書る類也。今小野里氏なるもの、此邊に多し。○上郊慶按に、今里見村あり碓氷郡に入この地、群馬郡なる事、古記に見えたり。北に風戸・本庄の名有。扱風戸・上郊・音近し。是かの廢郷ともいはん歟里見の名は、始て東鑑に見へたり猶考べし。○畔切　小相木是乎。この地官道の域にあり。小相木は小畔切の義にや。相木・會木など借字にて、安木ともよめり。又此邊青木の庄といふ、是も安木にて、安木利を略せしものなるべし。○群馬　和名久留万と訓ず、車川ありて名所とす。今爰に善地村あり、其他榛名山の裾回にして、群馬の名わづかに遺れり、是れ彼廢跡なるべし。

○桃井　八幡太郎義家の孫、足利上總介義兼が四男、源義胤、始て桃井と號す。此地に起りしなるべし。

子孫播磨守直常、此邊に居りし事、太平記に見えたり。今山子田と云、此邊桃井の原存す。

○有馬　今の有馬村なるべし。馬寮式、有馬島牧見ゆ、又此地なるべし○ついていふ、群馬の地名、長岡・大友・八木・小野・有馬・古市・長野・井堤・原・高井・狹野・田中等の姓なるべし。矢原は矢田部、富岡は鳥見部生原は池原、菅谷は菅野、島名は島根、柴崎は柴垣、萩原・八木原などは、蓁原・群馬は車持公抔にて、皆尸より出しも多かるべし。

○惣社　いにしへ國府からず惣社を立られたり。有レ事二于國内官社一、則國司率二僚屬一、先修二典禮於此一、其儀如二京師神祇官一由、式に見えたり。今上野惣社、元惣社村等のありて、元惣社村に社有（惣社、方言惣坐と云。所して、又經津主神を齋り。社領二十六石、社氏赤石氏二家、祭禮九月九日尤大祭也と云々。祭磐筒男命・磐筒女命に

○群馬の古府　既に廢て詳ならず。和名鈔群馬郡の條下にいふ、國分爲二東西二郡一、府中間國府とあり、今國分の郷ありて（西國分・東國分と云。東は新地に元惣社村より出るといふ。）西を前原といひ、南に棟高あり、東に惣社ありて。中央引間村ありて其外冷水・足門・道寺・稻荷臺等の名、何れも居所に出て、此邊いにしへの國府の地なるべし（西國分に修驗大藏坊ありていと物ふりたる地なり、坊中命符の古書、皆國府と記して國分といはず。此地上古の國府也、後の世謬て國分と書といへり。文明十六年奉護院の宮、入給ひし室とて今に現存す、凡三百廿餘年也。按るに國分て東西二郡とすなど和名の文躰詳ならずといへども、大略此地に叶ふにや。

東鑑曰、治承四年九月卅日、新田大炊助義重、挿二自立志一、引二籠上野國寺尾城一、聚二軍兵一。又足利太郎俊綱爲二平家方人一、燒二拂同國府中民居一、是屬二源家一輩、令二居住一之故也ト云々。其頃迄猶群馬の國府はありしと見えたり。（今の人、高崎の地を中古より府止の宿などいひて、國府の地也などいへども、こは偏堺にてそれとも云ひがたし）

○國分寺　今東國分村にはわづかの寺ありて、國分寺といへども、此地は新地にして取るも足らず（按に今菅谷と東國分との間に、方二町餘りなる大寺の跡ありて、礎の石布目瓦など、今に殘れり、こゝらや實にその遺跡ともいふべきか）

並國分尼寺は天平年中建られたり、主税式上野國國分寺（延喜主税式曰、凡諸國國分寺、各起二正月八日一、迄二十四日一、轉二讀最勝王經一、其布施三疋絲三十斤僧尼各絁一也、綿一也、布二端、定坐沙彌尼、各布二端、但供養用二寺物一と云々）の東に古市村あり、是彼の牧にやありけむ。（古を古に誤し、なるべし。）

群馬郡利苅の驛　已に廢て其地詳ならず、自野後凡二十五里許にあり。

和名鈔群馬郡利苅郷の下に驛家とありて、延喜式群馬郡官驛その名ざす所見えず。只坂本・野後郡・佐位・新

田と見えたり。この野後郡てふ郡名なし、是は群馬の馬の字かけしより、又群を郡に誤りたるものなり。よて今爰は和名鈔に從ひて、假に驛名をまうけたるのみ（是より下皆和名に從ふ）

○前橋下に公田村見ゆ。田令にいふ、凡諸國公用ㇾ云々。解に公田とは乘田なり、今の地主とは是也といふ。公田の下に河内村有、（按るに此邊惣名なるべし。）東鑑、殿下領、白井・河内と見えたり。

○二ノ宮二ノ宮社（勢多郡）　人王七十代後冷泉院の御勅願所也とかや。（傳いふ、院より佛舍利一粒御寄納ありと、社司田所氏いとものふりたる宮居なり。これより上大屋村産泰の宮、又事ふりたる地也けり。

佐位郡淵名のうまや　其他詳ならず、自利苅凡二十里に有

兵部式、佐位新田と見え、和名郷名、淵名の下に驛家など見えたる、此地に起りしなるべし（蜜行、鎭守府將軍秀郷五代の孫也。足利・阿曾沼・佐野・園田・大胡・佐貫・大屋等の祖也）今淵名ありて大村也。されど官道にあたらず、爰に堀下村有り、此邊惣名赤堀といふ（赤堀十村凡此邊も淵名庄といへり）上にいふ淵名村より十二里許上方に有が中にありしなるべし。下淵名に大國神社式内小生子大國主神、又名大穴牟遲と云々。

○和名鈔佐位郡郷名七　名橋（奈波志）（廢）　岸新（廢）　反治　佐井（廢）　淵名（布知奈）（存）　雀部（佐々伊倍）　美侶（今茂呂是乎）

名橋　未詳、今波志江の名あるのみ○岸新　又詳ならず、それ名橋・岸新の名たるや、皆水邊に出たり、今爰にかす川あり、疑くば彼水涯などによりて、堀下村・波志江村などその廢郷ならんか○反治　は借字にて土師（ハジ）などの義にや、今蓮村是なるべし。○佐井廢　境是歟、是坂合部の姓に出たるべし。又は國郡の境目なるをもていふなるべし○雀部未詳或はいふ伊勢崎是その轉じたるならんと○美侶　今茂呂則ち是なるべし

美と茂と字形似たり、後の世傳寫の誤より、かく轉じたる成るべし○佐位郡の地名、雀部・佐鳥・坂合部等は尸なるべし。伊與久は伊與部、反治は土師、武士村は建部、木島は紀ノ部、生方は生田、小柴は柴垣、安堀は安曇宿禰、下觸村は布留の姓などなるべし。

新田郡淡甘のうまや　凡自淵名十三里ばかりに有

夫木告やらは妹やとかめんにねたやま岩根の枕たれにかはすと　家隆

和名鈔、淡甘郷下に驛家見ゆ。按に淡甘、和名闕、今是は阿波加比亦は阿布美などよむべし。甘を加比と訓は夫甘・牛甘・などの如し、比と美と同音にて加美ともいはるゝ也。今本町有亦大原と云宿は北より南に至る東道は西より東に行て、此邊笠掛原といふ。東北に阿佐美の名あり、是かの贋郷にやあらん佐位郡赤堀、國定村より東に行は本町に至り、又東笠掛原に出で、山神村成塚村を經て下野佐戸の驛にいたる今に東道と云。○太平記に新田義貞義兵を起し、生品明神の前にて旗をあげ、笠掛野へ打出ると見えたるも此地なるべし。山神村に山神の祠有、土人の説にむかし義經、奥州へ下りし時、その杖につきたる松枝を二本たはむれて愛に建ぬるを根づきて二本の松となれり。此神躰は彼松を齋ひて、近き頃迄はその古木有しといふ。又叢塚村にも義經ゆゑみせし温泉ありて、その故をいふとぞ、此邊すべて義家・義經などゝみちのくへくだられし道なりけり。

○和名鈔新田郡　郷名五　新田　澁野加須乃　石西　祝人波布利　淡甘　驛家

○新田　新田庄世良田と太平記に見えたり。世良田は大郷也屬邑今十二地也。得川・大館・その東西につらなる。

○澁野　廢　今粕川村あり是乎○石西　和名闕　按に伊波爾之と訓べし、石井をいは井とよむに同じかるべし今の岩松、彼郷の轉じたるなるべし岩松の名、太平記等に出たり。○祝人　未詳、今爰に強戸の名有、強戸或は郷戸ともいふ其他官道の域にして、新田成塚より行ば、右に金山あり、左吉澤山有て、萩原強戸といふ、思ふに是神戸なるべし。扨祝人の郷も、此邊の神祠に出たる名なるべし。延喜神名式にも、上野十二社の外、新田郡に官社は見侍らず、されど此郷名有からには、いつかしかるべき神のまませしなるべし。今の熊野村なとや、かゝる神の遺跡ならんか　神戸はいにしへ神封の地にして、神の御賞をいふ也。舊事本紀に天孫降臨の條に、二田物部あり。一説に二田の地名は、上野新田郡新田の郷にやといふ。又いにしへ常世の國、高天原などいふは、今の關八州の地をさしていへりなど見えたり、おれば此二田物部の神いませしからに、祝人の郷もうへ有ぬべしと思はる。猶くわしき事はいふべきにもあらねばこゝに略しぬ。

○淡甘　上にいふ阿佐美の地是なるべし。東鑑、阿

佐美太郎など見えたる、此地の住人なるべし。按に新田は大郡也、然るを領郷五、又少からずや。今何れも詳ならず、わづかにその思ふところを記して、後の考を待つのみ。上古いづれも大郷なりしと見えたり

○ついていふ、本郡の地、新田部・祝部・高尾・高岡・田中・英多・志賀・手良・田邊・大村等、皆尸なるべし。江田は英多。天良寺井は手良姓。金井・小金井は金の姓。福島は福當。矢島は矢田部。脇屋は和氣。鳥山は鳥見部。綿井は渡に出たり。原宿は原市村。市ノ井は私市の姓。その外地勢産物に出たるも又多かるべし。

○大館　按にはじめ新田の一黨此地に據れし歟大館は本郡の族なり當國康和の頃より八幡殿の四男式部大輔義國致仕して、此地及下野國足利兩所の間に居る。其嫡大炊助義重を新田の祖とし、次男義康を足利と號す新田の支流猶本郡に多し東鑑曰、建久四年四月二日、覽二那須野一、廿三日同御、此間於二式部大夫入道上西一ガ新田館一御遊覽、自二其所一直還御と云々。

○和名鈔山田郡　郷名四　山田　大野於保乃　園田曾乃太　眞張萬波利

山田　廢　按に今の桐生村松堤村の邊に求むべきにや○大野　廢　廣澤・境野の邊なるべし○園田　則今丸山宿・吉澤村の邊、園田庄といふ。蘭田七郎成朝、東鑑に見えたり吉澤村に園田氏なるもの多し。丸山宿前に丸山あり哥書毛流山是乎、末と毛は同音也　俗ギヨウド山と云ふ是凡官道の域にあり　むかしは大家也といへり。末流山形にして云上に足利の山を見る、北に桐生山あり、南の方山の間に下野佐野を望みて、其景色いふばかりなく、廻りて丸山宿にいたる　○眞張　廢　按に今の三堀村彼郷の轉じたるならん末と三と同音にて、波と保の濁は通ふなり。○山田　郡地名山田・大野・長岡・清水等は尸なるべし。矢田堀・矢部は矢田部ノ姓、富田は跡見、臺ノ江は臺、石原は磐余、丸山は丸子ノ姓などに出たるべし○源平盛衰記に、矢田判官義清あり、新田義國の三子、仁木細川祖なり　木曾義仲に隨て備中國水島合戦に討死す、今矢部村あり、此地の産なるにや矢部は矢田部の約なれば也

○大町村芋ノ森は、世にいはゆる弘法大師の石芋なるものあり、水中にありて、その葉常に枯ずといへり葉莖よのつねの芋に異也といふ。○桐生古城には桐生大炊助居る、上州八家の一也八家は末東鑑・曾我物語にも桐生、東鑑にも見ゆれば、按に哥書切蒲の岡、この地なるにやいと古き地なるべし。

拾遺未勘一本桐生に作 朝またき起りふの岡にたつきしは千世のひつきの初なりけり　元輔

下野國足利郡餘戸驛

延喜式下野國驛馬、足利・三鴨・田郡・衣川・新田・磐上・黑川・各十疋と見えたり。かくて陸奥白河にいたるなるべし。和名鈔餘戸の郷中驛家と見ゆ、則今の足利其地なるべし。北に餘戸村、今に存せり餘戸村、或は五十戸とかく、戸令に云、五十戸を以て一郷とす、もし五十戸にあまりぬれば、別に餘戸を置と見ゆ、よて五十戸もてヨベとよむなるべし。又萬葉のうたに、五十戸をイベともよめり、家をイヘといふも五十戸の訓なるにや○足利宿より東に行ば田沼村あり、此邊美加保山あり、いはゆる三鴨の轉なるべし。和名鈔都賀郡里ノ名、三島あり、是又三鴨の誤りならんか○學校　人王五十三代淳和天皇の天長九年、大内記參議小野篁、依二勅命一草創云々。一說に足利尊氏將軍草創ともいへり分類年代記には足利義兼、甞剏二學校於足利一、納下自二中華一所二將來一先聖十哲畫像、祭器經籍等上云々。其後百餘年を經て、源尊氏再造二聖廟一といふ其後文明年中、僧快元和尚建立するとかや、川を朱水と云桐生川地を東魯と云本尊藥師を安置す、慶長中御建立也。

○足利染物　徒然草に、最明寺入道鶴が岡の社參の次に、足利左馬入道のもとへ、先使をつかはして立いられたりけるに(略)其座には亭主夫婦、隆辨僧正、あるじかたの人にて座せられけり。さて年ころに給る足利の染物、心ともなく候と申されければ、用意し候とて色々の染物、三十前にて女房ともに小袖にてうぜさせて後につかはされけり云々。其頃染いだしたるなるべし。萬葉十四下野國哥下野の美かものやまのこならなすまくはしころはたかけかもたん

國郡名義考

○上野國　名義未詳。古史皆上毛野・下毛野とす。古事記自註、上菟毛とす。按に、舊事紀國造本紀に、元は毛野國なるを難波高津の朝仁德分て上下となすと見えたり。白石翁の古史通によるに、上毛野・下毛野・其外山東の諸國は、神代の時、常世の國に屬して、豐斟停尊、上毛野に起り給へるにやといへり。常世國は、今の常陸國也。凡神代の事は、たゞ地名に殘りたるのみ。高天原も同所に有。豐斟停又、豐國主尊・豐雲野尊・豐香節野尊・浮經野豐買尊・豐齧野尊などとも申、又其豐國城の國ともいひしなるべしといふ。今碓氷郡に豐岡村などあり思ふに崇神天皇の皇子、上野・下野の地に御坐て御名を豐城入彥と申

奉るも有ればなるべし。又神武天皇の御兄を三毛入野命と申も古事記には御毛沼命とす、沼と野は同音也。此常世の國に入給ふ故の御名なるにや神武東征時、御毛沼命ハ跳二波穗一、渡二座于常世國一、稻氷命、爲二妣國一而入座二海原一也、云々。扨毛野國といふ事いかなる義にや。和名鈔、豐前國郡名にも、上毛・下毛の名有て、加牟豆美介、之毛豆美毛と訓、毛の字美介と訓、三毛御毛など同義にて、御食の義なるべし。藤原系圖に、御食子大連といふ人あり。又用明天皇の御名を、豐御食炊屋姬と申奉る、譬は食國政申大夫を、ケクニノマツリコトマウチキミと訓たぐひにて、采地を食の義に見ゆ、御食野を毛野の國といふは、思ふに此國は地形廣平にして、田畠開け、嘉穀豐饒にして、御食物多き野邊なる故なるべし、漢土にも郊原を以て東方不毛の地などいふたぐひ也豐城皇子などの知り給へる地なる故に、御食野の國といふべきを、御食と毛と同義なるゆゑに、毛野國とはいひしなるべし三毛入野命と申は後の世より申奉るなるべし、又屯倉の字をもみやけと訓るは彼御食物置所なればか、扨國郡二字となりたるは、元明天皇の御宇に始れり、諸國郡鄕能字をとれと云。

○碓氷郡和名字須比　碓日日本紀宇須比万葉笛吹太平記或は臼井に作る。一說倭武尊此地に蹲踞に出るといふ、或は綠林白浪のたぐひ爰にかくれて、相圖の笛を吹たるゆゑに笛吹の名有ともいひ、又は上古臼井川の源に石臼を置ゆゑの名ともいふ、皆今字によつていふ說にして未詳。思ふに碓氷は倭武尊、一名小碓王と申奉る日本紀然れば此小碓王の出ませし嶺故に碓日の名有にやと思はる、されど猶碓日・宇須比なども此の借字に見ゆれば只なにとなく此山の東に向ひて朝日の登るより幽にうつろふて美しければ、しかいひしなるべし萬葉の歌にもひなくもり、ひのくれになど冠らしめたり。

○片岡郡加多於加　この地背向に甘樂を擁し、前に烏川の流を帶て地形遙に仰ば、實にかたゝちの岳といひつへし。然れば名も又こゝに出しなるべし。和名鈔片岡郡若田あり今碓氷郡に入思ふに往古は今の板鼻・八幡の邊より、下は山名に到て、郡地なほ廣かりしなるべし。和銅年中多胡郡を置れしより、かく小郡とはなりしなるべし。

○甘樂郡加牟良　一說甘樂は信濃・武藏の間にありて隱國の地なれば、しか名づけたるべしといふ。郡中御荷

鉾山あり又三株といふ亦辛科郷今多胡に入韓級とも書て、多胡に隣る。思ふに、いにしへ韓人置れたる地なるべし。扨甘樂は加良の義ならんか。又御荷鉾の名に出たるも知るべからす。神奈川・蕪川など、皆かむら川の轉なるべしといふ。

○多胡郡胡音如呉　名義未詳。按に多胡・多古・田子・手兒など同義にて、高の義ならんか、土地の高きをいふなるべし。高をタゴと訓し例は見えねども、多珂といふより多胡ともいふなるべし。高坂を香坂とも書き、香山をカゴヤマともよむ類也。但し高坂の高は假字にて、隱るゝの義なれど、又道の高低をタカヒコなどともいへば、多胡は高きの略なるべし多珂・多賀など外の地名にも多し、今なほ多胡村につゞきて高てふ村存せり。

○綠野郡美止乃　今字によてみどりのと云べからす。和名美止乃とあれば此義を用ゆべし。思ふに美は水にて、止は處の意なるべし。譬ば里は狹處といふ類也。此地北にからす川有て、神奈川西南より來りて、武藏國を境ひ、かぶら川西北より落合ひて、相川又中央をくだる。終に諸流をこゝに會して、東の方立石・新町をへて利根川に落たり。然れば綠野は水處野の義ならんか、歌書みどり沼有て、當國とすれども、未たしかならず。

○那波郡　名義盡くおし極むべからずといへども、しばらく思ふ處を記してこゝに編集を終るのみ。按に那波は借字にて、繩などの義ならんか。和名伯耆國、郷名奈和あり。亦阿波國にも三繩・來繩等あり、國を定め縣を定むるの上古、今の世の繩入るゝなどいふことに出たるにや。又土產によていふも知るべからず又はからやうの那の字は平すの義なるも多し、那須・寧樂・奈良など、皆ナラスの義也といふ。

○群馬郡久留万　今の世グンマといふは字音の俗習也。和名群馬郷あり、久留萬とよむ。群馬・石馬・有馬など馬の字を用ひたるは、上野牧多き故なるべし。歌書車川、上野或は山城とす。土人の說に今白河の水源善地村のうち、わづかに群馬の名殘れり。又此川水車の如く廻るによて車の名爰に出しなるべしと。扨名義を思ふに、水車の如くめぐる故、車川といふはいかゞにや、古語に石を句離といふ、古事紀の歌に、由良能戸能斗那加能伊久理爾布禮多都那などよめり、釋日本紀に句離は石をいふ、異は助語也と見えたり。

されば この久離の離は留に通ひて、久留ともいはるゝなり。間は半の義にて、物のあいだ也、傍例をいはゞ、伊勢の名所に栗間あり、是栗を久留と訓也。よて思ふに、車川は水のめぐるにはあらで石間の意なるべし此邊山の谷にして石たかし この車の里あるによて、郡の名にも及びたるなるべし。群馬・車間・栗間など同義なるべし。姓氏錄に車持朝臣は上毛野朝臣と同く、豐城入彥の後也と見えたり。又地形を以てすれば此郡は國の眞中にして、東に利根川あり、西烏川有て、南にかぶら川・神奈川等の諸流を帶び、北は伊香保嶺を負ひて車の形に似たる故なるも知るべからず。

○吾妻郡阿加豆末　一說倭武尊、碓日嶺にて吾嬬者耶と有しより、東國を阿豆末といひ、又この國に吾妻の郡あり、是又今字によりていふなるべし。吾妻は借字のみ、和名阿加豆末といひて阿豆末といはす、思ふに吾妻の吾は縣也、妻は傍例あるべし、上妻下妻などいふ地名、諸國に多し、妻はツマルの意か、物のツマリを端といふ也、譬ば衣の端をツマといひ、木の口を角抓といふ類也、今こゝは縣の端か、又縣約の義ならんか、此地北方のつまりにて、山間の郡縣なれば也。

○利根郡止禰　按に舍人舊事紀刀禰等禰姓氏錄止禰和名鈔その中、舍人等禰・止禰のたぐひは假字なり、刀禰・利根と書きたるに意あらんか、刀はスルドなる物なり、利はトシとよみて物のとき事也、物の早きを疾といひ、物のするどなるを尖といふ、根は古語に山を根と云、嶺の義也。筑波根・不二の根・甲斐の根のたぐひ也。思ふに利根はトガリたる嶺多なれば、利嶺の郡なるべし。和名に利苅の里ありてトカリと訓也。これらを思へばいづれにも根の義なるべし、山の縣なればなり。

○勢多郡　名義たしかならすといへども、押て是をおもふに、北に赤城の大山有り、郡地は其下回をめぐる、然れば勢田とは下の義か、山下と云意にや、下の約は須也、須と勢は同音にて通ふ也、譬ば伊勢國は五十鈴の川の名に出たりといふ類、五十鈴の須々の約は須也、須勢かよひて伊勢なるべし。今爰も山下の斯多を勢多と云同義なるべし。下の字又は之津とも訓、下男をしづのを下垂をシヅクといふ類也、之津の約須となる、須勢同音にて勢田なるべし。山の下地なれば也。山上といふ里もあれば、山下てふ所もあり

しなるべし。

○佐位郡　和名鈔郷名佐井、又雀部あり、思ふに佐井は郡縣境目の義に出しか、今境村存す、又狹少の義にてその郷地狹をいふなるべし、雀部佐々伊倍と訓は、鶺鴒の事なり、鶺鴒ば小鳥也、是も其地の小なるを以て譬たるべし、亦古語に佐井と云は少由理草の名也、大和の佐草河は小百合草の多き故の名なりといふ、今こゝは其地のせはきを鶺鴒にたとへて名づけたるを、後に郡定られし時、佐々伊倍を約て佐位としなるべし。

○新田郡　爾布太　傍例を按に、近江坂田郡の郷名上丹あり、又上野甘樂にも丹生あり、丹生・壬生・埴生などは皆土の古語也。土を丹といふ、新田の新も丹の義なるべし。田とは助語也、例なほ多し、舊事紀に二田物部と有も是なるべし。萬葉の歌には仁比多とよみ、和名には爾布太と訓は、只その丹をひきていふのみ、外に意あるべしとも見えず。

○山田郡　夜未太　是はたゝ山といふのみ、外に意有べしとも思はれず。田は助語也、又田井の義なるも知るべからず。思ふに山田そのかみ新田の域に出しならん、今上仁田山など有れば也。

○邑樂郡　於波良岐　名義未詳。押て考るに、石見國郡名邑知ありて、和名於保知と訓す、邑は大也、今オフラとよむは誤也、於波良岐の波をのぶれば保阿となる、然れば於保阿良岐にて岐は助語也、譬ば新羅をシラギと云類也。扱於保阿良は大海なるべし、大海をおほあらと訓む、仲哀紀に天皇登二高岳一遙望レ之大海遠而不レ見レ國と云々。今爰に大海三つあり、一を多々良沼といひ、二を近藤沼と云、三を板倉沼と云ふ。上古草昧の時、水海有けんも知るべからず、然ば邑樂の名は大海の義にて、此水海に出たるべしと思はる。相樂・設樂など、樂の字を用ゆる地名多し、皆借字なり。凡諸國郡郷の名好字を著と古史に見えたるは是等の事なるべし。

上野名跡考（中一）

上野國群馬郡防人　富岡正忠撰

宇須比夜麻　同阪

万葉十四　比能具禮爾宇須比乃夜麻平古由流日波勢奈能我素低母佐夜爾布良思都
ひなくもりうすひの佐可をこえしたにいもかこひしくわすらえぬかも

按に、碓日坂ひらかれたる事、何れの御時にや、未詳ならず。思ふにいと上代よりありけむ。國史倭武東征の頃ほひ、既に此阪はありしと見えたり。日本紀、景行天皇四十年庚戌六月東夷叛、帝詔二吉備武彦與二大伴武日連一、従二日本武尊一討レ之、入二陸奥玉浦一、東夷悉平、還自二甲斐一北轉、歷二武藏・上野一、西逮二于碓日坂一、時尊毎有下顧二弟橘媛一之情上故登二碓日嶺一、而東南方望レ之、三歎曰二吾嬬者耶一、故山東諸國、號二吾嬬國一といへりとぞ。古事記によるに、此説と又大に異なり、尊平二和山河荒神等一、還上幸時、到二足柄之坂本一、食二御粮一處、其坂神白鹿と化して來り立つ、其咋遺りし蒜の片端を以て打給へば、目にあたりて打殺しぬ、故登二其坂一、阿豆麻波夜と云々と見えて、足柄の事とす。舊事紀には、尊平二東夷一、還參未レ薨二於尾張國一と見えて、かゝる事も傳らず（按に右等の説紛々として、未いづれか是なる事をしらずといへども、尊の還り上り給ふは日本紀の説をよしとせんか、弟橘媛は穗積氏忍山宿禰の女也、姓氏錄穗積朝臣は、神饒速日命五世孫、伊香色雄命の後也と見えたり。）

千早振熊野のみやのなきの葉をかはらぬ千代のためしにそひく　前中納言定家

嶺上の景色いふばかりなく、一眸に東海の諸國を眺む、此地に熊野神を齋く（是を信上の境とす）按に是上古日本武を祭りしものなるべし、中代矢建の明神といふも此宮居と聞えたり。曾我物語に、大將頼朝なり武藏國入間より上野國松枝の宿に着給ふ、その夜ねらへども山名・里見の人々との爲に參る、（中略）按に山名里見は上野の源氏也あくれば信濃・上野の境なる、うすゐのみなみの下に着給ふ、つぎの日はうすひのたうげにあがりて、やたてのみや

う神にうは矢をまいらせと云々。

按に碓氷は此嶺の總名にて、くろてつき山・鼻曲山・中尾山抔あり、皆信乃境とす、中尾山は一名矢崎といふ、南は入山にて甘樂に屬す、中間碓氷の紅葉有、享保中中院より安中侯に送られし歌とて、人口に膾炙するも又この地なるべし。又横川の關より南川を隔て、中木山といふ有、人家を中木といふて五料につぐといへり。

手兒乃欲姚佐加

萬葉 東路のたこのよひ坂こえかねてやまにかねんもやとりはなしに

夫木 ましらをを遠方人の聲かはせ我こしわふるたこのよひ坂

實治百首 いましはやとりも鳴也あつまなるたこの呼坂誰かこゆらん

歌枕、たこの呼阪碓氷の一名也といへり。八雲抄東國とし、或は宇都山と云、又箱根山ともいふ也（按に其地いまだ詳ならず）○坂本は上代大郷なりしと見えたり　○續日本紀、神護景雲元年三月、上野國碓氷郡人、上野坂本公黒益、賜二姓上毛野坂本臣一と云々。

紫式部

藤原光俊

百合若說

五料と横川の中間道の傍に巨石ありて凹に人の踵の趾に似たり、此邊の俗に上代（ソノカミ）百合若大臣弦に蹈て、遙に妙喜白雲峯の後なる磐石を射ぬきたりとて、今に大なる岩窟、彼の巖の中央に見ゆ、又その矢落る地を矢川と云甘樂郡西牧に有、元より俗說信用すべからずといへども、暫く人口に因に、百合若大臣は豐後の國守として強力の精兵也、むくりこくり日本に襲來せし時、賊を討て功有抔人口に膾炙すといへども、正史實錄にも載せず、公卿補任尊卑分脈等にも見えざれば、有し人とも思はれず。井澤氏の說に豫章記に河野氏越知家乘伊豫國の領主三並といふ者、神功皇后三韓征伐の時先鋒也、夫より九代に百里（モヽサト）、十代に百男（モヽヲ）と云ふもの有、其子益躬、蒙古襲來せし時、推古帝の勅を奉て、賊の魁首を射殺と見ゆ、百里若大臣は是等の說に據て作り出せしにやと云々。又貝原氏は日本武なるべしといへり（貝原氏紀行）實にさもあらんか、尊の出ませし地なれば也

○學校（松井田に在）其地今廢、承和六年、小野篁、建ると云傳ふ。然れども篁上野國司、或は介に任じたる事、國史にも見えず、又碓氷は國府にもあらず、此地に學校有べくも思はれず、今玆は土人の說によて附す、何れの時建られけん未詳ならず、主稅式上野學生料一萬束と見ゆ（按に本朝釋奠は每年春秋二仲上丁の日釋奠す、大學寮下已日、始て行る由續紀に見えたり。是より代々行れて、文明の頃までありしといへり。如レ此諸國にも學校をまうけられしなるべし。篁參議小野峰守子、近江・信濃・陸奥國等守、大內記大宰大貳、東宮學士、式部少輔、勘解由長官・彈正大弼・遣唐使・左大辨・參議從二位、承和元年二月配流隱岐國、同七年四月歸京、仁壽二年十二月二十二日薨、年五十云々。是による時は、承和六年といふ事いといふかし、猶考ふべきにや。

○安中越前守憲家　永祿六年據二松井田城一、武田信玄攻てこれを下し切腹せしむ。かくて小宮山丹後守原與左衛門等を入置、武田亡て小田原より大道寺駿河守直宗に與ふとなん。松井田又松枝と書、五音相通也。此地東に國衙村有、思ふに鎌倉の時國衙の使抔いふ事に出しなるべし（按に、衙とは國府の事にて、此に有るべくもなし、唐制、天子居曰レ衙、後世官府又曰レ衙、蓋衙者所二以人衆一也、國府亦同と云々、是也。）

○新堀村金剛寺（眞言新義談林寺、領廿石余）いとものふりたる寺也。東鑑。文治三年四月、豫州（義經なり）在所未聞、日來被レ修二御祈禱一、而若宮別當法眼、被レ蒙二夢想一、曰於二上野國金剛寺一、可レ遂二豫州一、仍彼寺住侶等、可レ抽二御祈禱丹誠一之旨、被レ仰二付藤九郎盛長一と見えたり（○主殺式、諸國春秋二仲月、各一七日於二金光明寺一、請二部內衆僧一轉二讀金剛般若經云々。この金光明寺と云も又金剛寺の事にや）

○後閑故城　北條四郎政村の孫、內匠頭政時居る、廿樂郡丹生山の領主新田主水正景純が爲に亡ぶ。其後景純此地に移住す、其子伊勢守信純、武田氏に屬して氏を後閑と改む、其子刑部丞信久、駿州今川合戰に討死して城廢（○後閑氏は新田義貞の弟四郎義重七代の孫なり）秋間に山をへだてゝ秋間あり、是秋名の姓なるべし（和名抄飽馬に作る）東鑑、飽馬太郎抔見えたり。秋間の背らに里見有（この山をきじがう峠と云）里見は源氏一流大新田と號す、其先義重の男太郎義俊二子あり、嫡子は伊賀守義成也、二男義清田中と號す、又義成の子里見太郎義基二男大島藏人義繼、三男時成、鳥山三郎と號し、末弟義行豐岡三郎と號す。東鑑云、寛喜三年十一月廿八日、前伊賀守從五位下源朝臣義成卒、是幕下將軍家寵士也と云々。

○**權田三ノ倉は**（群馬郡なり）里見につぎて諸田村入合の地なり（諸田或は室田に作る）碓氷郡岩氷村・川浦村と川を隔たり（烏川の水源也）權田村に川を境ひ牧地有て、駒形の名見ゆ、中世何れの時か置れしや詳ならず、土人は熊谷が乘たる權田栗毛も此地に出し抔いへり（盛衰記には熊谷が馬は郎黨權太か奥州より買來たりと見ゆ）按に、延喜の頃九牧なりしも其後かはる〳〵轉じて、鎌倉の時は猶諸所に分ちたるべし。東鑑文治二年の左馬寮にも、上野の牧は見え侍らず、猶考べき事也。

石部ノ里　亦石邊に作る

新葉未勘　山路よりいそへの里にけふはきてうらめつらしき旅衣かな　讀人しらず

新葉集の撰者は南朝の皇子宗良親王にて、上野宮とも信濃宮とも申奉りき。去れば此國に暫く御座有て、東國の事にも馴給ふべし。扨この歌、礒部の里に叶ふにや（石と礒は同し）石部は石上部なる事、上卷にも見えたり。

横野

万葉　むらさきのねほふよこのゝ春の野に君をかけつゝうくひすぞなく　讀人知らず

新續古今　むらさきの根ほふよこのゝつほすみれ眞袖につまん色もむつまし　俊成

家集　むらさきの根ほぶよこのに照月はその色ならぬ影もむつまし　清輔

山家　菫咲くよこ野のつはな生ぬれはおもひ〳〵に人通ふなり　西行

按に、八雲抄・宗祇國分・勅撰名所抄・藻鹽草等、皆上野とす。其他いまだ詳ならず。つたへて白雲山の麓東南の曠野を横野と云（安中より妙喜へ行道、是を瓶尻とも、横野ともいふなり。）又赤城の下の廣原是なり共いへり（赤城にいふ）延喜式交易雜物に、上野、紫草二千斤と見ゆ、かゝる地名產なる故、歌人のすさびとは成けるにや。

○**安中ノ故城**　安中左近大夫忠成居住。上州八家の一也（八家は小幡・白倉・安中・倉賀野・右西郡の四家とす。又大胡・山上・沼田・桐生を東郡の四家と云、安中氏、其先未詳）始上杉に属し、永祿六年武田に降り、長篠・遠州合戰安中見ゆ。武田亡て織田家に從ひ、後北條氏に属して、天正十八年安中亡云々。　○鷹巢壘　信玄依田六郎を入置といふ。

○**碓氷川**　水源碓日嶺の陽に盃を浮べて、是に後閑・秋間等の溪水を交へ、板鼻・豐岡をへて烏川に入る磯部・岩井の地は皆この水涯に臨んで甘樂の郡地をかぎる。思ふに石馬の郷も又此地につらなり、中代の水災に廢れし成べし（石岩等の字、皆いそと訓で磯の意か）

○**和名鈔片岡郡**　郷名五　若田（和加多）　多胡（廢）　高渠（太加無曹）　佐沒　長野（奈加乃）

按に若田廢れて若田村わづかに存す（碓氷郡に入る）永祿年中、長野氏と甲軍と若田原に戰ふといふは此地也○多胡未詳とす思ふに和銅四年甘良・片岡・綠野等の六郷をわかちて多胡郡を置る。其地は今多胡郡に田子村有、是其名起りたる地なるべし（片岡郡と今の田子村とは行程遙に隔て別也）扨爰にいふ多胡の郷は彼村とは別にして、又其地を押に、若田につゞきし所なるべし（按に、豐岡・乘附の邊にや有けん、今乘附村山間に大黑新田の名ありとかや、タゴの意ならんか。）○高渠　思ふに鷹巢是乎（今碓氷に入）太加無曾・太加乃須・音通へば也（按にこの邊すべて中古迄片岡郡也、八幡大聖寺の記に、豐岡郡板鼻庄と見えたり、中世かくいひしと見えたり。是等は亂世の豪族、己が住所の名もて、みたりに然かいひたるものなるべし、この類諸國に多し。）○佐沒廢、按に今石原是なるべし、この地差出の有名、是佐沒出の義ならん（大出・小出などいふ類、諸國に例有、今差出なる者有、氏いづれも古き名の遺りしものか）

○長野　すでにすたれて詳ならず、地形を押て考るに、寺尾・根古屋の邊なるべし（○東鑑上野の黨に、高山・小林見ゆ、思ふに綠野郡の住人にて秩父一家の者にして皆平姓也、又同系譜に長野三郎重清と云有、疑らくば本郡綠野につらなる長野氏。この地に起りしものならんか。）

○因にいふ、此邊地名長野・寺尾・豐岡・板鼻・鼻高・富田・若田・大島等は皆いにしへの尸なるべし。寺尾は手良、板鼻は板茂、富田は福田、若田は若姓などより轉じたるべし。石原は磐余といふに同じかるべし。磐余の若櫻宮を今石原・石村抔と書如し。神武紀に、大軍集而滿二於其地一、因改レ號爲二磐余一抔いふに同じからん（○清水觀音堂棟より奉納の古記を出す、堂一字上野國片岡郡豐岡庄岩長郷と云、この岩長は長野の轉じたるにや。）

○**寺尾故城**（俗に茶臼城と云）　新田氏代々據二于此一、始祖大炊助義重は（法名上西）八幡殿の四男式部大夫義國の一男也、九條院判官代と成、左衞門尉大炊助に任じ、從五位下に叙す、其の子義範、山名と號し、伊豆守に任ず、太郎義俊は里見の祖也、家嫡義兼は皇嘉門院の藏人に任ず、四男得川四郎義季、五男額戸五郎經義、六男新田冠者義光、同小四郎義佐等也、皆此地に起る（按に義重始此城に居、後上西門院の御科に付て世良田を庄官せしなるべし）○東鑑、治承四年九月三十日新田大炊助源義重入道、挿二自立志一、引二籠上野國寺尾城一、聚二軍兵一云々。

○浪合記、初廷元元年遠江國住人飯谷井伊介道政等、宮方にて宗良親王を遠州に迎奉る（尊澄法親王云々。）後道政が女、御子尹良親王を生む（於吉野元服、任大納言、元中三年八月、賜源姓と云々。）かくて應永四年上野の宮方、世良田・桃井・新田・小田・並四家七名字（四家七名字）遠州の諸士と計て、尹良親王を上野に移さんと、先づ駿河宇津野に至る處、鎌倉の方人襲來て柏坂に戰ひ、丸山の館をかこむ、其外所々の押留に年暮て、漸く明る五年八月、上州寺尾の城に入る（世良田政義居城也）其後政義女、御子を生む、是を良王君と稱す（後下野國落合城に生長し給ふ、落合は桃井氏居城也）年ありて應永十九年四月、上杉憲定、多勢を以て寺尾城を拔といへり、思ふに今の館村杯や、彼王のいませし遺跡ならんか。

○三島杜彦狹島王墳（此社回事數百歩、若爭へば本道に不出と云）○日本紀、景行帝五十五年二月、以二彦狹島王一、拜二東山道十五國都督一、是豐城命之孫也。然到二春日穴咋邑一、臥レ病而薨レ之、是時東國百姓、悲二其王不一レ至、竊盜二其尸一、葬二於上野國一云々。今この社を彼王を祭しとて、石の小宮を齋ふ（又群馬郡下濕村、元島名村の境に淵あり、土人しやうごん淵と云、是實は將軍淵にて、淵北に古墳有、傳へて彦狹島王を祭りしとて小宮を齋ふ。又元島名に隣りて島野村あり、是島王の名より轉れりと云。）

○清水寺觀音（石原村に有、八幡大同元年坂上田村麿建立と云（按に田村丸東夷を討しは、延曆二十年也、陳奥達谷窟の賊高麿引兵清見關に攻上る、田村をして討せらる由國史に見ゆ。）永祿の頃、和田兵部大輔信業、堂等再興といへり（信業は和田の城主なり）○薄根松（同所にありて今殘る）○臺ケ松（豐岡にあり）○家隆神祠（上總介家隆卿をまつる）○加里宇の池（已上、乘附村にあり。）

遐國雜記　名のみして宮木にもるゝたいか松ひく人なしにとしやへぬらん　道興

○白雲の山　或は常陸

古歌未勘　しら雲のやまをゆくかとおもふまに君も我身もさかりすきゆく

抑々甘樂郡白雲山妙喜權現の社頭は、山勢嶮岨にして碓氷の西南に連り、列峯其背（ソカヒ）向に峙ち、雲は旦暮に起て、白衣を懸たるに似たり。傳云、當社は、比叡山の法性房尊意僧正也とかや（一說、尊意は天台の座主にして天慶三年二月二十四日遷化、年七十四と云）元亨釋書、尊意姓は丹生氏、平安城の人也、其先應神天皇の後胤と見えたり。今茲に丹生村あり、和名抄、甘良郡丹生郷名、丹生有氏の者住して、其祖先なるを以て、茲に祭りしものなるべし（別當石塔寺社領卅石、上代は新田郡世良田長樂寺の末寺なりしを、今は東叡山のお持となりて、監寺を置る。）近世長清法印を開山とす（長清は江戸東叡山元光院に住して、當寺を兼帶す）是より世上に繁榮して、春秋の詣人たゆる事なしとぞ　○長清墳（當山下坊にあり）○中ノ嶽　所祭武尊大權現（日本武尊也）○菅原天神祠　○飛總祠（中澤村にあり）

荒船の御社

拾遺物名　くきも葉も皆みどりなるふか芹はあらふねのみや白くみゆらん　藤原相見

上野・筑前・同名所也。西牧信上の堺にありて尤高山也。其形屋宇の如なるを以て破風山といひ、又砥山ともいふ也。信濃にてはあら舟山といふ、船の南天に行に似たり。拔鉾の神、最初鎭座の地也と云（菖蒲の池ふ處あり、菖蒲綾女に同じきや當郡今綾女庄あり。）堯惠が北國紀行にも、白雲山ならびにあらふねの御社、その北に淺間と見えたり、又この哥名所抄すべて筑前とす、今彼國宗像郡奥島に、船の形なる大磐石あつて、上に社を齋ふ（高大明神といふ）世にあらふねの御社是也とぞ、扨吾國人もふるくもいひしと見ゑて、彼法師すらすでに記しぬれば、こゝに出しぬ

阿羅布乃池

新拾遺未勘　川上やあらふの池のうきぬなはうき事あれやくる人もなし　曾根好忠

あらふの池、いづれの國か未詳。今上毛郡村故事てふものに、荒舟につゞけてつらねしからは、菖蒲の池の名によりしと見ゆ、然れどもあやめとあらふ、いかて混ずべきや、猶考べし　○三代實錄元慶四年五月廿五日戊寅、授二上野國正六位上稻葉神從五位下勳十二等一云々、今稻含山有て稻含神社坐、是にや（栗山村太山の頂上にあり、一說拔鉾の神第二の鎭座也と云）

○和名鈔甘樂郡

郷名十三　貫前（奴木乃佐）　酒甘慶　丹生存　那非廢　端下　宗伎（今曾木村存）　端上　有只（今大牛村存）

那射　額部（奴加倍）　福島是乎　新屋爾比也　小野乎乃存　拔鉾

○貫前

按に延喜式貫前神社と見えたり、則今一宮是なるべし。今拔鉾と云、和名拔鉾郷を別にわけて記

せしは誤にや、思ふに拔鉾と貫前と同訓か。拔はぬくと訓、貫也、鉾はホコと訓、鋒の誤りにや、鋒はキッサキ也、軍陣の先鋒をサキカケ抔いふ如く、前の義と同じからん、然れば拔鉾・貫前は同義にて、皆奴木乃佐とよみしなるべし、バツムとは音也、凡地名、音もていふは後の事也一說拔鉾は神號也と云

○酒甘　和名闕、按に佐加比と訓べし、酒養也、甘を加比と訓ば牛甘、大甘抔の如し　大養又犬飼な　其地廢、傍例を押に、貫前、丹生の地に並しなるべし、按に酒と坂とは同例多し、酒井・坂井などの如く又大小に分ちたる地所々に有、爰に小坂村上中下の三つに分つ、是にや　とゝも書く

○端上端下　和名闕　名義詳ならず、按に端は神代卷に麗山に臨しく、其他麓山に臨し所なるべし、然れば曾木に川を隔てゝ向ひの地國峰・内匠・岩染・秋畑・善慶寺或は野上村など山の下回に連なる處に求むべきにや。

○有只　是宇志と訓べし、山城綴喜郡里の名に有知、又有貳などよむ名あり、今の大牛村妙喜山下の地是なるべし、式に古市牛牧あり、此地亦そのかみ牛牧ありしなるべし。續紀。天平神護二年五月甲戌、上野國甘羅郡ノ人大初位下蟻部ノ牛麿等四人、賜二姓物部公一云々、此牛麿てふ名も、又この郷名に出たるものか。

○那射・那非等の地　未詳ならず、思ふに甘樂はこもりくの地なれば那射・なみ・ならす等の地、皆平の字義にて、多く有しなるべし。○額部　既に廢て、今福島の邊、額部の庄と云ぬかべの井といふものあり是額田部の姓にいでたるべし、新田系圖に額戸五郎經義と見え　義重の五男也　大平記、額田掃部助正忠、義貞に隨て功あり、思ふに上野の住人にて、此地に起りしものなるべし。○新屋　廢て天引村に屬す新屋の名わづかに存　亦東福島に隣て、庭谷村あり、思ふに是も新屋の轉なるべし、傍例をいはゞ、備中國賀夜郡に庭妹と書て丹比世と訓む鄉あり、このたぐひなるべし。○小野　大鄉也　屬邑七ツ　今相野田てふ、小町山得成寺などいふ寺あり、土人猶小野七鄉といへり。　俗には小野小町生死の所なりといへり

○式に、新屋牧・鹽山牧見えたり。思ふに是甘樂郡也。今白倉の内、黒駒といふ地あり、是新屋牧なるべし　新屋の鄉中にあり　扨鹽山牧は南牧なるべし、今鹽澤・小鹽澤等の名、又馬居澤抔の地名あり、古牧其中にありしなるべし。按に、東鑓、左馬寮領に信濃國御牧のうちに緒鹿牧・荻倉牧等あり。一說に緒鹿は今の恩川村なるべしと云、又荻倉は今の萱倉なるべし　荻にうみかやの訓あれば也といへり。已上の地名、皆甘良郡也、此地信州古牧の封境につづけり。

○ついていふ、甘樂の地名、丹生、菅原、額部、新屋、大野、大桑原、高尾、引田、宮崎、川合、櫻井、中野、八木連、左京分、野上、等は上古の戸より出しも多かるべし篠は雀部、小坂は坂合部、酒甘は味酒部、富岡は跡見部、岩染は染部、小幡は小沼田、造石は造の戸、小林は拜志、君川は吉彌候部のたぐひなるべし、恩賀は緒鹿牧　信乃星尾、羽澤、馬場、尾井上、白尾、尾付、坂爪、等の名は古牧の封境に出しものなるべし、又一宮邊すべて綾女庄と云、是いにしへより貫前神社の封戸なるべし　蒲谷は今の社頭を云　愛に起りしものにや

上野國一宮貫前神社　延喜式神名式名神大

一宮記云、祭神經津主神也、異說神社本紀曰、金橋宮ノ天皇安閑時、若櫻宮魂神功皇后從二洲輸一遷レ主鎭座云々　元は洲輸　一宮村に鎭座　國史或拔鉾神社と云々、神領二百石

神代卷に云、高皇產靈尊、更會二諸神一、選二當遣一於葦原中國一者上、僉曰、磐裂根裂神ノ子、磐筒男磐筒女之子　下宮に座と云

經津主神、是將レ往也と云々。

○按に、當社の神は神代の時、天照大神・高皇產靈尊と謀たまひ、饒速日尊を此國に降臨なさしめ給ふ時、武甕槌神と共に命を受けて、葦原中國を平定し給ふに、二神出雲國五十田狹の小汀に降到て、十柄劒を拔て倒植、其鋒端に蹲踞て、大穴貴神にとひせめ給ひ、又其子事代主神を從給ひて平定したまふ由、神代卷に見ゆ、蓋拔鉾の號は茲に起りしもの成べし　劒を拔てその鋒端に蹲踞すと云を以て、ヌキサキの名あるか。式に貫前と有　は假字にて拔鉾といふは、この拔鉾の鉾の字を、鉾に誤り來れりと見ゆ。

○承平に秀鄉流鏑馬を射初て、射藝を後代に施し　感長私記の說也　康和に敦基御劒を奉じて、十旬の雨を祈り　上野介敦基也、文績文粹七卷に出づ　義家茲に祈誓して、奥羽の亂を平ぐ　一宮鐘の銘を取る　義重寺尾城に據て此神を信じ、賴朝塔を建立して永く末世に傳る、思ふに甘樂の郡地は古雅にして、いとものふりたる事多かり。　いにしへは當國第一繁昌の地にて、あらゆる品を商ひ、年暮の調度も茲にて事足り、鎌倉より遊女も來りて揃要の處也といへり。

雪玉　誰が爲とをりなすならし秋の色にとみの岡部の木々の錦は

とみの岡部　未勘といふ、今茲に富岡あり、東鑑・富岡五郎見ゆ又群馬郡にも同名の村あり是跡見部ノ姓、或は鳥見部ノ姓抔に出たるべし上古天子の御獵には射部鳥見部（イベトミヘ）なとあつて御獵に從ふ也、新撰姓氏錄抄に、止美ノ連は豐城入彥命四世、荒田別命ノ男田道公、被レ遣二百濟國一、娶二止美邑吳女一、生二男持君一、三世孫熊次新羅等、欽明天皇御代參來、其男吉雄、依レ居賜二姓止美連一と云々。今茲に織茂氏なる者あり和名多胡の鄕織裳姓は秦也、傳て其先甘樂郡富岡及多胡吉井の邊に至て、二十餘氏の服織部（ハタヲリヘ）置れて、大伴旅人（タビシド）卿國司たる時、はたをりて奉りし抔いへり。彼吉雄（ヨシオ）らの遺跡などにやすべて豐城皇子の子孫此國には多かるべし。

○小幡故城　は小幡氏代々此に居る、後天文の頃、憲景入道泉龍齋、國峯の城に移る、憲景長子を重貞といふ初尾張、後上總介二子氏信彈正忠三男信秀左衞門尉四男昌定又八郎等並國峯を守る云々○按に、太平記に小幡見ゆ、山内上杉の宿老にて上州の故家也。一說其先羊太夫より出づ、羊十四代を茂常と云、天喜九年十月死す、是迄は公家にて十六代氏繼、始て武家と成、子四人ありと云。

○白倉故城　白倉は上野名跡也。山内宿老四人の内にて、後甲州に屬し、亦小田原に從ふ、箕輪記、白倉左衞門尉宗住見ゆ姓未詳

○鷹巢城　下仁田にあり小幡三河守景宗、居二于此一、上杉謙信に隨て鶴が岳拜賀に見ゆ　○當郡古壘　○庭谷庭谷左衞門居小幡の組也　○砥澤南牧　○西牧初信玄小幡泉龍をして守らしむ、後小田原より多目周防守長定を置　○宮崎宮崎和泉守　○丹生山新田小四郎義重の孫茲に居る。　○奧平奧平貞俊居、其先兒玉の族也。

○高尾村に仁治四年　の古碑あり按に、仁治四癸卯は寬元と改元也八十七代後嵯峨帝の朝也。壬生忠家・小野國文・藤原孝勝・同近英・壬生文重・同守文・藤原國忠・守部國宗等十二人の姓名を割む碑銘は梵字六字を剋す亦笹街道にも巨石あり大日橋といふ、又仁治三年二月八日の字有て、三十餘人心を合て、寶塔を供養する趣なり石長一丈四尺余、厚四寸八分許、幅二尺九寸斗也。

○神流川　濱平の山中より出て、武上の界を過ぎ、今里村に至て屈して北流して、綠野・那波に至て烏川に入、三波石はかの源、今里村の水涯に有て、南は武州に堺ひ、城山あり、つたへて將門の城也と云。田波川は名石有。

○かぶら川　西牧・南牧等、諸山の溪水下仁田に合ふて星田の南に至て高田川に合ひ、綠野郡山名・落合の中間に年魚（アユ）川を交へ、森新田村にして烏川に入、角淵に那波至て神流川に入る。

○續日本紀天平神護元年十一月戊午朔、上野甘樂郡人中東物部蜷淵（ニナフヂ）等五人、賜二姓物部公一云々。又三代實錄、貞觀十二年八月十五日乙未、上野國郡外散位正八位上壬生ノ公石道（キミイハミチ）、賜二姓壬生朝臣一云々。按に物部壬生等姓、彼高尾村の碑銘にも見えて、上野の國人なり、思ふに此壬生は丹生に同じかるべし。今壬生の地なく、丹生・壬生・埴生は皆土の古語也。和名の丹生鄕是れにや、扨小野姓彼碑に見ゆ、是は小野の鄕より起り、物部は彼蜷淵等の裔なるべし。

多胡入野　同嶺

万葉十四　安我古非波麻左香毛可奈思久作麻久良多胡能伊利野乃於久母可奈志母（アカコヒハマサカモカナシクサマクラダコノイリノノオクモカナシモ）

新續古今　葛の葉を吹夕風にうらふれて多胡の入野にうつらなく也　季廣

つゆふかきたごの入野の草枕ぬれても今宵はやく給ばむ　光欣

多胡は西北に甘樂・片岡の山をかたどり、西南又日野山・秩父山を負ひ中にも御荷鉾山は或三株山とも甘良の堺に秀出し、前に綠野の廣原を蹈、遙に武藏に至れば、實に入野也けり、萬葉の詠歌、此に起りしもの成べし今鹽村の谷をいふは誤りなるべし。

万葉十四　たごの根によせ綱はへてよすれどもあかでやしづのそのかほよきに

たごの峯いづれとかせん、いまだ詳ならず。凡この地は高峯南より西に峙ち、みかぼ・八束・牛伏の名有て三ツの峯いづれも高く、中にも牛伏山・郡の中央に蟠て、牛の伏たるが如し、今茲に長根の名有は長根村といふ、或は世に中根ともいふ。彼峯にぬかづく地なればにや也、ぬかづくは向づく向峰のたぐひ扨は多胡峯（タコネ）とは、この牛伏をやいふらん。

○御荷鉾山は　高峯也或美加夫といふ東西にあがちて、西は甘良に高く、二峯は多胡郡也。高峯を不動ヶ嶽と云ひ、次を釜伏をとけといふ。東西の峽を擲石峠と云、山中に出ツ土人の說に、久代この嶺に鬼神住て人民を害す、弘法大師是を

調伏せしかば、鬼神石をなげて去る、其石の落る地、是を鬼石と云、大師不動を彫て山上に建るといふ。按に此邊不動を祭り、東權現を齋と云地多し、俗說ながら誣かたし。思ふに不動は日本武尊なり、大山の祠官太田氏、嘗て予にいふ、彼地石尊は、延喜式にいふ阿夫利神社にて、日本武命を祭るとなり。去れは此地も尊の出ませし國なれば、かく所々に其遺跡のこりしなるべし。今も武州小平村の山につゞきて、兵器を埋め給ひし地を、陣見平といふ也

○八束山は　神保村の上に有也東權現の祠あり、亦觀音寺など云寺ありて、いとものふりたり、つたへて羊太夫の墟也といふ。此の邊の說に上古羊太夫といふ人ありをして上京せしむるは小脛の力也、後故有て小脛を害せしかば、羊毎日都へ朝する事あたはず、終に叛逆の聞有て、その身滅亡せしと云。思ふに羊が事跡はしらず、今茲に東權現有は、日本武也。扨八束小脛といふもの居しといふも又似たる事あり、日本紀に日本武東征の條に、天皇則命三吉備武彥與大伴武日連一令レ從二日本武尊一、亦以二七掬脛一、爲二膳夫一云々。按に是後世の兵粮奉行のたぐひ也、八掬脛も亦かゝる類なるべし。

倭名鈔多胡郡　鄕名七　山宗也未奈、按に宗宜作奈、誤也。織裳於利毛　辛科加良之奈、神保村是也　大家廢　武美廢　俘囚廢　八田今矢田村存

○山宗則今山名也。續日本紀、山等に作るは誤也　東鑑、山名見ゆ　今緣野郡に入　按に山奈は山根の義と聞ゆ　奈と根は音通也　又は山穴の義なるも知るべからず　この地大穴あり、いにしへの穴居なるべし。　○織裳廢今織茂に作る、長根村に屬す、上古服織部置し地なるべし。服部・錦部のたぐひ皆同じかるべし。

○辛科　續紀韓級に作る、是韓矢田部など書たるべし　韓矢田部は豐城命の後なり　則今神保村辛科神社有、是なり。○大家地利を押に多比良村是か、大家・大宅は同じかるべし。國史和銅二年大宅朝臣大國、上野の守となるよし見えたり　○武美　和名鈔、多計美と訓べし、譬ば信濃に武美別神社有が如し、其地水邊に有てかぶら川・年魚川の邊なるべし　又黑無村に武沼と云所有、是にや　○俘囚　思ふに是は卿名とも聞えず、たゞ俘囚置れたる地なるべく、或

は今の吉井是ならむかといへり。

○續日本紀・天平神護四年五月壬戌、在上野國新羅人午足等、一百九十三人、賜二姓吉井連一云々。姓氏錄・吉井宿禰高麗人伊利須使主男・麻互臣之後也と見ゆ　按に今吉井氏なるもの所々に多し、彼午足等の裔なるべし。

○因にいふ、多胡の地名、吉井・河內・矢田部は姓也、大家は大宅織茂は服部の類、神保は辛科の神封に出たるべし。高は土地の高きをいひ、鹽は土地の低をいふ、木暮は吳公、辛科は賀良の姓などにや、賀良は新羅國郎子王之後也、凡多胡郡は韓人置れたる地多し

○辛科神社　按に神代系圖一書、素盞嗚尊鎭坐云々。神代卷云、尊所行無レ狀、故科以二千座置戶一、而遂逐レ之、是時素盞嗚尊、帥二其子五十猛神一降二到新羅國一、居二曾尸茂利之處一云々。今この地を百濟庄といひ、新羅人に吉井姓を賜など、國史の文体、思ふに韓人の齋ひ奉る神なるべし。按に此處上古は甘良郡の地なり甘良は賀良の郡てふ義にや。

○多胡庄　今田子村存、又非池庄とも云　多胡帶刀先生源義賢、居二于此一、六條判官爲義男、秩父二郎太夫平重隆が養子夫木　たつなみにつゝみの聲を打そへてから人ふせく沖の島守　顯仲　也云々。

○東鑑云、木曾冠者義仲主者、帶刀先生義賢二男也、義賢久壽二年八月、於二武藏國大倉館一、爲二鎌倉惡源太義平一被二討亡一、于時義仲三歲嬰兒也、乳母夫、中三權守兼遠、懷レ之遁二于信濃一、令レ養二育之一云々。亦彼國多胡庄、爲二亡父遺跡一之間、雖レ令二入部一、武衛權威已輝二東國一之間、成二歸住之思一云々。

○多胡古碑　下池村にあり　續紀和銅四年三月、割二上野國甘樂郡織裳、韓級、矢田、大家、綠野郡武美、片岡郡山等　按に等の上奈字落と見ゆ　六鄕一、別置二多胡郡一云々。かの造郡に建られしものなるべし、上古防と烽とを置れて、蝦夷の備にせられしといへり。

○日本紀・天智天皇三年於二對馬島・壹岐島・筑紫國等一、置二防與レ烽云々。續日本紀・和銅五年廢二河內國高安烽一、始置二高見烽及大倭國春日烽一以通二平城一云々。按に上野和銅の頃、しばし〳〵東夷の亂ありて、かゝる時、置れしなるべし。

○一鄉山城　安倍中務元友居○新堀城　毘良豐後守友定居○鹽川城　菅沼大膳介之常居○川内　牧野丹後守重元居○長根上場城　長根右馬助居　以上の城、代々上杉家の旗下也、永祿年中、信玄の爲に廢亡、

倭名鈔綠野郡　鄉名十一　林原八也之波良　小野乎乃未詳　升茂廢　高足立石村是か　佐味廢　大前廢　尾張牛尾村是乎　保美存

○林原　和名閑　土師波爾之本鄉存　俘囚廢　山高高山庄是也

按に小林村彼鄉中なるべし　地名大小上下を分つは多し　東鑑・高山小林黨見ゆ、是　拜志・林などの姓なるべし　○高足　思ふに太加之とよむ也、音にきくたかしのはまのあだ波は抔よむ類也、太加阿志の阿を略したる也、亦石を志と訓む、下石などの如し、今玆に立石村有、是高足の轉なるべし。

○佐味　姓氏錄・佐味朝臣は上毛野と同祖にて、豐城命の後也といふ、思ふに是小水の義にて、今の三本木村の邊にや　此地小川あり　○小野・升茂・大前・詳ならず、小野は中村の邊、升茂ハ岡ノ鄉・大前ハ大塚村などなるべし　○尾張　是尾張部の姓に出たるべし、尾張連ハ彦八井耳命の後也、今牛尾雲尾等の地名、かの廢鄉なるべし、鬼石といふも、尾西ちふ事なるにや　○保美　按に保は高きを云、美とは助語にや亦思ふに、保美とは蹈の意か、景行紀に、帝碩田國に至るに、柏峽大野有レ石、天皇祈レ之曰、朕得レ滅二土蜘蛛一者將レ蹶二玆石一、故號二其石一曰二踏石一云々。

○土師　本鄉是也、此に土師の宮居有て、祭禮に角力を取事あり、思ふに久代、野見宿禰の故事によれるものにや　古事記註に、穗日命の後、上毛國造となる由見ゆ、くはしくは上卷に出す　土師姓は天穗日命より出て、野見宿禰の後裔なり　國史垂仁天皇二十二年、野見宿禰、奏請レ止二殉用一人、改以レ土造二物形一殉レ葬、帝喜從レ之、仍賜厚賞二野見一賜二鍛地一、任二土師職一因改レ姓爲二土師臣一云々。姓氏錄・土師宿禰、光仁天皇天應元年、改二土師一賜二菅原氏一云々。いにしへ土師部置れし地なるべし　○山高　按に是傳寫の誤にて、上下顚倒せしもの成べし、今高山庄といひ、高山村あり、是嵩山忌寸の姓なるべし　唐人張道光等の末也と云

○鎭守府將軍平良兼四代、左衞門尉致經五男將恒、武藏國に住す、其子秩父別當武基、其子武綱は、伊與守賴義に隋て武功有、其子下野權守重綱四子有、嫡子重弘が子は、畠山莊司重能、其子重忠と相續す、二男重隆は葛西・佐貫・河越の祖とす、三男高山三郎重遠此地に住して、代々高山氏とす、四男江戸四郎重繼を江戸氏の祖とす　又小林氏も同流の平氏にや、東鑑に小林二郎重弘見えたり、太平記雉日合戰の條高山遠江守淨法寺左近太夫・小林右馬允・白鷺越前守など見えたる、皆この地の住人なるべし

小野　又乎度

萬葉一六　かみつけの乎野のたとりかあはちにもせなはあはなもひとりのみして云々。和名抄・小野すたれて見えず、今中村あり、此邊烏川・年魚川の水派にして、河内の地なればをのゝたとりのたど〳〵しき兒らも有しなるべし、或抄に乎度・小野・五音かよへばかくもあれど、今古說にまかせて玆にいふ　按に、小野其地いまだ詳ならず、今中村に小野里もて氏とするものあり、彼のうた又この地に叶ふべければ、しばらく玆にいふて方土の人の補を待のみ。

美止里沼　或美止女沼

夫木　みとめぬにうきたる蓮くれなゐに水にこるなり波たつなゆめ　讀人不知

同　紅にはちす浮たるみとり沼にしらなみたてはこきませの花

綠沼　夫木集東國とす、この歌延喜六年、藤原定文の家歌合に、綠沼紅蓮浮といふ事をよめりとなん、今爰に引て綠野郡の事とし侍れど、綠野は和名美止乃とよみ、みとりぬと訓ねば猶考有べし。

○綠野寺　今廢、綠野村あるのみ　續日本紀・仁明天皇承和元年五月、勅令下相模・上野・下總・常陸等國司勠レ力寫二取一切經一部一來年九月以前、奉中進其經上、本在二上野國綠野郡綠野寺一云々。或曰、淨法寺村淨土院　天台宗齊田三十石　この地いとものふりたり、傳へて傳敎大師の開基にして、聖德太子の草創也といへり、元亭釋書・傳敎傳に、大師東國にて經塔の法會を執行せられし時、上野國綠野寺の場に來り、法の供養に預者凡九萬人、下野大

慈寺にては五萬人也と云々。又上野國般若淨土院とも見えたり（太平記・淨法寺左近太夫見ゆ、上古はならびなき寺成べし）

○綠野郡地名林原は拜志（ハヤシ）・小野・高足（タカシ）・佐味・尾張・嵩山・岡之郷・栗須・士師のたぐひは、皆上古の戶なるべし山崎は山前（ヤマサキ）、矢場は矢田部、大塚は大部などの姓成べし。年魚（アユ）川は間川（アヒ）にて郡の間をくだり、平井はひらきならすの義、落合は水派の落合たるに起しなるべし。太平記の篠塚加賀守は畠山重忠の後とす、今しのつか村有、この地に出といへり。

○平井故城（金井村に有）　上杉氏代々玆に居、其先は勸修寺の流にして內大臣高藤卿より出づ、勸修寺長者憲輔五代の孫、藏人重房、始て丹波國上杉庄を賜て氏とす、其子上椙三郎賴重が子、兵庫頭憲房、足利尊氏の命を以、建武二年上野國の守護職となる、其子憲勝を扇ヶ谷の祖とし、憲顯を山內といふ、是平井上杉の始也。其子憲方（安房守）其子憲定、其子憲基、其子憲實、其子憲忠、成氏の爲に誅せらる、家臣長尾景春、越後の上杉房顯に請て上野に居しむ、名を顯定に改む、鎌倉の管領と稱す、其子憲房、其子憲政と相續して、天文二十年小田原北條氏の爲に平井城廢す。○山前城（藤岡也）芦田下總守幸成居、其先信州佐久郡滋野黨の流也。

○小林　東鑑・小林二郎重弘ありて大和守に任ず、平姓也。秩父の系譜小林氏見えず、思ふに一流なるべし、既に高山は見ゆれば也、太平記に小林右馬允出たり（小林氏は上野に久しき名跡なれば今こゝに出す、東鑑に高山・小林・大胡・佐貫と見ゆ、皆上野の黨々也）

○山名故城　新田三郎義範、始て山名と號す（大炊助義重の三男）從五位下伊豆守に任ず、賴朝卿の時、受領六人の內也。其子義節・重國・重家あり、重國五代の孫伊豆守時代（法名道靜）足利尊氏に隨て起る（子孫後但馬國に住す）

○根古屋山中古碑有　神龜三年丙寅二月二十九日、上野國群馬郡高田里、三家子孫、七世父母の爲に誓願して、石文を奉る由見ゆ。

○世に七轡の松は　羊太夫が妻妾を葬といふ、今七興山宗永寺有て、その故をいふ（近年石棺を出すといふ）此地佳景也。予一日落合村に至て松を見るに、一株七本出るを以て七腰といふにや、又この地は四面平らかにして溝をたゝへ、中に塚を築ていと高し、按に是上古、王子親王など葬し陵なるべし、貝原好古が著したる神功皇后の陵、八幡宮本紀に見えたり、能く彼圖に倣ひ任じ給ふ國なれば、國史にもれてこの國に甍じ給ひしも猶有ぬべし、一說に羊は文武天皇の皇子、刑部親王の諱也ともいへり。

○木部　木部駿河守範時居、先祖は蒲冠者三河守節賴の孫、吉見二郎義世の後也、始石見國木部鄕に居、後古河公方に隨てこの地に移住すと云々。

○鬼石神祠（鬼石村に有）　平親王の公達を祭といふ、思に秩父將恒は將門同流の平氏なり、疑らくは將恒を誤りしもの成べし、此邊將門の城といふもの、多く皆將恒の遺跡にして、秩父一家の據し地なるべし　○鬼石村より西に入る事十數里、土人是を山中と云、甘樂郡にして讓原村・今里村・萱薙村など、猶屬邑若干あり、其他神流川の兩岸に對す、今里村の內に三波石あり、向は武州秩父郡とす。　○ついていふ武州秩父は舊事紀にいはゆる知知夫（チチブ）の國是也、續紀和銅元年正月乙巳武藏國秩父郡獻二和銅一と見ゆ、秩父の次は兒玉郡也、兒玉は武藏七黨の一也、この地金（カナ）さら山有、延喜式金佐奈神社是なり。兒玉に續きて賀美郡とす此邊立野村見ゆ、馬寮式立野牧是なるべし。亦勅使河原の地名（今村有）是勅使（シ）の駒牽に出たるもの成べし、公事根源廿日は・八月也武藏國小野の御馬四十疋ひかる、其外秩父の御馬廿疋、立野の御馬十五疋、毎年に奉らると見ゆ（馬寮式・武藏國石川牧、由比牧、小川牧、立野牧等見ゆ。）

年中行事歌合

むさし野をわけこし駒のいくかへりけふむらさきの庭に出らん　頓阿

武藏七黨は七姓也（七黨の說未詳、予が考得る所左之通り）

○一、藤原の姓　四方田　庄　淺羽　櫻井　若兒玉

○二、丹治（タヂヒ）の姓　安保　加治　青木　中山　黑田　勅使河原

○三、小野の姓　猪股　橫山　岳部　人見　甘糟　荻野

○四、日奉（ヒマツリ）の姓　平山　由木　其他　十四氏有

○五、私市（キサイチ）の姓　河原　久下

○六、紀の姓　大井　品川　春日部
　　潮田　大井田　堤
○七、清原の姓　葛西　豊島
　　已上二氏未詳

上野名跡考（中二）

上野國群馬郡防人　富岡正忠撰

鞘田　或は佐野田

万葉十四　かみつけのさや田の苗のむらなへにことはさだめす今いかにせん
夫木　なかれつるけふのみすもりかすそひてさやたの苗の取もやられず　俊頼

按に近世歌枕寝覚てふものに、さやたもてさのたとよみ、且佐野の條に入たるは佐野田の借字にちかひ有物也、今和名抄那波郡鞘田郷もて正しとすべし、佐野は群馬郡也混ずべからず（上古の野の字は、多く彌の假字に用ひし處多く、万葉佐野田とす）

今思に、群馬の齊田村也けり（此は和名によっていだすのみ。）

和名抄那波郡　郷名七　朝倉（阿佐久良）　鞘田（佐也多）　田後（多之利）　佐味　委文（之土利）　池田（伊介多）　韮束（爾良都加）

○朝倉　今猶存して群馬郡に入、朝倉につゞきて徳丸・力丸抔の名あり、是は丸部又は丸子宿禰などに出たる尸なるべし。○鞘田　廢て齊田ありや〳〵と響くは物の音也（應神紀琴を又群馬に入る）哥書に佐野田是也、名義の鞘は假字にて田は助字也、さにも豆能紀能佐夜佐夜抔よめり、又佐倍久佐比豆留などは、さへぎて人の耳にわかぬをいふなり、景行紀の佐伯氏も、本蝦夷の喧譁により出て、皆事のわかちかたきをいふ也（又佐也は多の意か、鞘巻といふも多に巻たるゆへの名なるべし、扨このさやは多なる田てふ事にや）○田後　廢る　地利を押すに、今角淵・後ケ村の邊にて、鞘田につゞきし地なるべし此邊利根川・烏川・水會の地、中世の水災に失しなるべし。○佐味　名義詳ならず、思ふに佐はこと發す語にて、味とは丹の義にや、萬葉・左丹著妹などいふ如く、丹とは土のあかきを妹が顔の艶なるにたとへたりの語也（丹は土）亦思ふに、佐は小にて味は水の義にや（小を狹といふは小野・佐野の類）此地利根川の水流に臨て今小泉村あり、こゝや小泉の意ならんか也、委文は上代の布也、之土利といふはしづはたをりを○委文　上ノ宮是なるべし、此地倭文神社坐せば也、倭文（シヅ）

略せしものなるべし（はたをりの太乎の反は土となる、さればジヅハトリなるをツハを略し○韮東　今韮塚村存せり、又丹良塚などとも書く、韮は上古用ゐし事多かるべし、（てシドリといふにや、そのシヅのッ濁故に土の字を用ひしなるべし。）東は高をいふ事あれど塚の義にあらず、こゝはつかぬる義なるべし（牧童などのつかねたるに起るか）新古今集・夏野ゆく男鹿のつのゝつかのまも忘れずと思ふ妹が心を、八雲抄つかの間は譬ば草刈てつかぬるほどの義といへり、又此歌男鹿の角のつかのまは、鹿の角のあたらしく生る時、一束ばかりみじかきを云。

○那波の地名、佐味・池田・田中・河合等戸なるべし。上中下の今村は今木ノ姓が、福島は伊福部、委文は倭文又は服部、玉村は玉造、柴は斯波柴垣のたぐひか、飯倉は生倉（イクラ）、茂木は水取り又は木部、角淵は角の姓などなるべし。

○那波庄　按に那波は上野の名迹也、東鑑・那波左近太夫政義見へ、亦永祿の頃、那波太郎など見ゆ、武田の臣に奈和無理之助と聞えたるも、上野の浪人衆と見へし（那波氏姓未詳、思ふに武藏兒玉の流にや）

○藏立院（那波庄金澤に有、いと物ふりたる地也）當寺の尊堯法師敵討のこと、猿樂の諺に見ゆ　○泉龍寺（柴村にあり、齊田十五石薗寺也）三才圖繪に見えたり、○大聖寺（金澤に有）

○那波は那波小太郎大江政廣居之、大膳太夫廣元の義子にて、實は右幕下賴朝卿の子也、那波・勢多・六十六村を以て封之、六十六ヶ國にたとへ給ふと云々（今上ノ宮村に、上宮彈正と云ものゝ子孫大江を以て氏とす）

佐野（附）舟橋

萬葉十四　かみつけの佐野の舟橋とりはなしおやはさくれとわはさかるかへ
後撰　東路のさのゝ舟橋かけてのみおもひわたるを知る人ぞなき　源等
詞花　ゆふ霧に佐野の舟橋音すなりたなれの駒の歸りくるかも　俊雅母
堀河百首　東路の佐野の舟橋朽ぬとも妹しまためは通はさらめや　顯季
讀古今　あづまぢの佐野の舟橋さのみやはつらき心をかけて賴まん　家隆
愚草　戀わたる佐野の舟橋かけたへて人やりならぬ音のみぞなく　定家
續拾遺　さのみやは佐野の舟橋おなじ世に命をかけてこひ渡るべき　津守國助
正治百首　東路の雪のあしたはしらなみの下よりわたる佐野の舟橋　寂蓮法師
新後拾遺　道遠き佐野の舟橋夜をかけて月にぞ渡る秋の旅人　信實
新續古今　きゝわたる佐野の舟橋かひもなし知らぬむかしをかけて戀れと　爲家

舟橋の事、未詳。しばらく土人の說によるに、むかし此川を隔て朝日の長者、夕日の長者と云ふ者、息男息女持たりけるがおやもゆるさで有しを、忍びく〳〵に契をこめて通ひしに、おやども聞知りて、いたう禁しめけり、然るを思ひ絕えずやありけむ、諸共にこの川に身を沈めしといひ傳へて、今に長者屋敷、舟橋淨などの地名遺れり。されば堯惠法師の紀行にも、藤原の忠信をしるべとして彼所を見るに、西の方に一筋たひらかなる岡あり、上に白雲山莊舟の御社の山あり、其北に淺間の嶽崔嵬たり。舟橋は向の東西の岸とおぼしき間、四面遙に平なり、兩岸に二所の長者ありしと老人のをしゆるなど書れしも、いとふるくも云傳へしものなるべし。

○國史に、桓武天皇延曆二十年辛巳、詔二諸國一、津渡設二舟橋一云々。

中川入江

夫木　瀨きりせし佐野の中川つゝきゐてゐ杭に波の音たえにけり　俊賴
千載　住馴し佐野の中川瀨絕してながれかはるはなみだなりけり　仲綱
建保百首　東路にかけては過し中川の瀨絕もつらし佐野の舟はし　兵衞內侍
新千載　うかりける佐野の中川さのみなどおふせ絕ても戀わたるらん　爲兼
拾玉集　五月雨は佐野の入江に水こえていてぬ尾花や瀧の浮草　慈鎭

按に、拾玉集の作は、此地に入江有にもあらず、たゞ五月雨にて入江の如く見ゆるをしか詠たるものなる

べし。

三輪ヶ崎　忠定

建保百首　もゝぐさやなみのよそにも三輪ヶ崎佐野の舟橋かけしと思へば

按に、三輪ヶ崎をよみしは大和國也、それに舟橋はあらず、是は兩國混合の事と聞えたり、今こゝの地にも又かゝる名所のあればしばらく記しぬ、中世國人の詠達ひしものなるべし。猶近江・紀伊・駿河・下野・信濃等にも同名は有也。

附倉下　又倉賀

万葉十四　麻久良我乃許我能和多利乃可良加治乃於登太可思母奈宿莫敝兒由惠爾

こは加茂眞淵の云に、地名の上に眞の語を置て重ねたる也。さて久良我てふ所の名を、久良の反の加を古に轉じて許我ともいひし故に、かくは重ねたる也。譬は同巻に上總宇麻具多とよみし所を、和名抄には望陀と有て、まうだと唱ふる如く、語を延ても約めても、いへる所世に多き也。扨この久良我は既に國しれぬよし有れば更に求めず、されど東の地名をいはゝ、和名抄武藏に久良岐としるし、今上野に倉下と書て、久良我と云ふ驛あり、下野に古河と書て許城と唱ふる所も有と云ふ。按に倉賀野を、眞淵は倉下といはれしにや、此地舟泊る驛なれば也。凡此邊を高田庄と云、根古屋村に神龜碑あり、神龜三年祖先の爲に造る所也。其文下賛鄉高田里と見ゆ、又太平記雉氷合戰に高田薩摩守見ゆ、皆此地に出たるべし。

○倉賀野故城　倉賀野淡路守照時居る、甲陽軍艦に倉兼五十騎と見ゆ。

條師輔公の孫、中關白道隆の男、伊周の二男顯長より出づ、其子遠岩、其子惟行、其子廣行、有太夫といふ、是本庄・四方田等の祖にして、子孫武上の間に多し。按に本庄・倉賀野は武藏七黨のうちにて兒玉黨也。兒玉系圖を考るに、兒玉は其先九

車里川　山城同名所

名寄　都より尋ねくるまの里人はひとね川をや渡らざるらん

又懷中抄　作者不知

夫木　くるま川けふ名やなとて流れけむおそろしけにも見えぬ渡を

和泉式部

和名抄鄉名、群馬と書て久留萬とよむ、上野國史に今の惣社村の邊、此地國府にして彼廢鄉なるべしと云ふ、高崎志に據に、今我峯・本鄉の間に白河有て、水源は榛名山の麓・善地村の溪水也。土人是を車川と云又此地に群馬の鄉と云名所僅かに遺れりと見ゆ。

○箕輪故城　永祿年中、長野信濃守業政居る。

かなる據なし、一說に高階氏の末也と云。在原系圖を見るに、業平の子棟梁と云、二男師尙、三男滋春と見ゆ、師尙は高階茂範の子となり　滋春は高階峯緒の子となる、去れば在原高階は同流也、但し業平の裔東國に有事は聞えねども、在次君滋春、甲斐の國へ行とて、信州みのわのむまやにて歌よみし事、大和物語に見ゆ。長野氏は信濃國みのわと云所より移るといへども未詳、石上寺といふ氏寺今に存す、思ふに大和國石上在原山光明寺は業平の葬地也。玉葉集に從三位爲子「かくばかり其の名のこりて在はらのむかしの跡を見るもなつかし」。按に長野は上野の名跡なるべし。國府・長野鄉と北國紀行に聞えたるも、今の小塙新波の邊也。東鑑・承久の役、箕輪太郎師政父左近太夫關東に軍忠有り、依て武藏國多摩横野を給る由見えたり、是等や彼祖とも思はる。

○附白岩觀音　白岩山長谷寺と云、未詳。箕輪記に、名和無理助は、手勢二百人にて秋間山を越へて、からす川をわたり、鷺阪常陸介が砦を攻て、白岩山に至ると云ふ、此時寺燒失也。

八坂井堤　同社野

万葉十四　いかほろ乃やさやかのゐてにたつ努自のあらはるまでもさねをさねては

夫木　東路やはり野の清水えてしより井手のやしろは名つけそめてき　顯季

仝　山陰のゐて野に咲ける女郎花色ゆへ人につまれぬるかな　師俊

八阪井堤・八阪稻荷神社並井堤大明社・今井出村に有り、所祭は神武天皇・經津主命・蹈鞴五十鈴姬ノ命の三

神也といへり。夫木集の哥判者光俊云、井手の社は昔景行天皇の御時、針野に御幸し給ひつるに、寒水を注て社を建られたり。かの夏后氏は以レ桀、殷人は以レ栢いわゐけん、唐迄おもひよそへられて、いみじく侍るかなと云々。

○日本紀、景行天皇五十三年癸亥八月、帝巡二狩東國一、到二伊勢一、轉入二東海一、過二淡水門一、十二月還二伊勢一而居、是謂二綺宮一、亦天皇自二伊勢一還、居二纒向宮一、云々。此時東海の諸國をめぐりて、井堤野に至り給へるなるべし。按に、是より前、天皇日本武尊をして東夷を征せらる、然るに尊伊勢に薨じ給ひしかば、其跡をしたひて伊勢に至り、又東海の國々に入給ふ、去れど絶えて久しき事なれば、あなかちにいひがたし。

○延喜雜式云、凡諸國驛路邊植二菓樹一、若無レ水處、量レ便堀レ井云々。

針原野

万葉 いかほろのそひのはりはらねもころにをくをなかねそまさかしよかは

仝 いかほろのそひのはりはら我きぬにつきよらしもよひたへと思へば

按に、はりといひ、はきといふ同義也。萩原はきはらといふべきを同韵に通はしてかくいふ也。榛・秦等の字、古歌はりともはぎともよむ也。播磨風土記云。萩原里土中有レ井、息長足姫（フキナガタラシ）、自二韓國一還上時、御船宿二此村一、一夜之間生二萩根一、高一丈、仍名二萩原一、即繙二御井一、故云二針間（ハリマ）井一云々。思ふに今高崎の東、萩原村あれど、萬葉に打つけて、いかほろのそひ乃はき原といはんに、是なるべうもなし、猶井堤野の邊に求むべきか。

附島の秋原

万葉十歌書未勘 思ふ兒の衣すらんに匂ひせよ島の萩原秋たゝすとも

此歌はいまたかうかへさる部に出て、其他詳ならず。今爰に和名抄里の名島名有て、彼郷地（クヌチ）にのそみ萩原村有、川を隔ちて利根川也向はきはらと云、思ふに島の萩原是らともいふべき。

原の池

六帖 はらの池におふる玉藻のかりそめに君を我とふものならなくに　貫之

堀河百首 冬さむみには鳥すたく原の池も世にむすほふる氷なりけり　仲實朝臣

原の池、世に攝津とす、河海抄風俗歌、をしたかへ鳴さへきゐるはらの池抔よみて、且上野とす、しかして未詳ならず。今爰に中尾村ありて南の方原といふ小村あり、此の地の北に雲津の池てふ名有、これや河海にいふ處の廢したるものともいはんか。此地國府の南にして、國府の官驛の域にあり。いひけんもおかしと見ゆ。

上野駒牽

年中行事歌合 上野やいてしもおそき有明の影みぬ月のすえの駒ひき　宗信法眼

右の哥によるに、上野の駒引は八月廿八日也といへり、よて月の末の駒牽とは詠し給ふ也。掃部式・二十八日牽駒、武德殿供二御座一、並設二親王已下出居已上座一、又後殿供二御座一、設二女官幄下一云々、但小月は廿七日を用ゆと見えたり。

延喜式左馬寮上野九牧

利刈（トカリ）牧　有馬島牧　治尾（ハリヲ）牧　久野（クヤ）牧　市代牧　大藍牧　拜志（ハヤシ）牧　新屋（ニヰヤ）牧　鹽山牧

右諸牧駒者、毎年九月十日、國司與二牧監若別當人等一、臨レ牧檢印、共署二其帳一（信濃甲斐・上野ハ任二牧監一、武藏ハ任二別當一、簡下繫歯四歳已上可二堪用一者調良上、明治八月附二牧監等一貢上云々。按に利刈牧・有馬島牧は群馬郡なるべし。治尾牧市代牧は吾妻郡なるべし。今羽尾市城等の名あり。久野牧・拜志牧は利根郡なるべし、上牧下牧の名あり。大藍牧・未詳ならず。新屋牧・鹽山牧は甘樂郡なるべし。東鑑に、元暦元年正月一日、武衛御二參鶴岡一、被レ

奉二神馬二疋一 馬寮式 山上太郎高光・小林次郎重弘等引レ之云々。何れも上野住人也。山上が馬は利刈立、小林か馬は新屋たちの駒などにや有けん。

○國府官廳 按に片同和爾雅、俗云評定所 ○大國守一人 名刺吏・使君・牧宰・國宰・大守 ○目一人 大相當從八位上、少相當從八位下、唐名主簿 ○介一人 大掾、相當正七位下、少掾、相當從七位上 ○掾一人 大掾有權介、相當、正六位下、唐名長吏・別駕 ○目一人 大掾有權少掾、相當從七位上 ○介一人 馬寮式、凡諸國所貢繫飼馬牛者、二寮均分檢領、乾移二兵部省一、其數之內、上野國馬三十疋、牛六頭と見ゆ。公事根元、上野貢馬五十疋と云々

按に國史、上野國始て國守たる人は、和同元年三月丙子從五位上田口朝臣益人、爲二上野守一由、續日本紀に見えたり、是其始なるべし。亦介は廢帝・天平寶字八年正月已未、從五位下田口大戸を爲レ介よし、始めて見えたり。其後淳和天皇天長三年九月、以二上總・常陸・上野・三國一、親王の任國となさる由、類聚三代格に見ゆ。是清眞人夏野が奏に依て也。是より已來代々親王任じ給ひて、他人こゝに任ずる事あたはず、依て三國ともに介國務を行ふ、是を三介と云也。上總介・常陸介・上野介亦介の字、調二加美一也 ○戸令云、凡國守年一巡二行屬郡一、觀二風俗一、問二百年一、錄二囚徒一、理二寃枉一、詳察二政刑得失一、知二百姓所二患苦一、敢喩二五教一、勸二務農功一、部內有下好學・篤道・孝悌・忠信・清白・異行・發二聞於鄉里者一、擧而進レ之、有下不二孝悌一悖レ禮亂レ常不レ率二法令一者上、糺而繩レ之云々。今はむかし源賴信上野介たる時、任國に居られしが、藤原孝親が家に盜賊入たりしを、孝親とらへんとす、賊二歲斗なる小兒をとらへて質とす、孝親すべきやうなく、賴信に告知らせるを、賴信の見給ひて取計ひし事ありしを、是よりいよ〳〵從ふ者多かりし由、或物語に見えたり。按に、これら皆國府の事ならん 治承四年足利太郎俊綱が燒拂しより、國府の官廳たえたるにや。

○惣社故城 文龜年中、長尾尾張守顯忠居于二此一、世に惣社長尾といふ是也。按に、長尾氏は其先鎌倉權五郎景政より出で、代々上杉の內官領也。建長の頃より上野に移る其一流なり。

○妙見社 引間村に有、いと物ふりたる地なり。按に、常陸千葉の妙見寺緣起に、妙見初は上州群馬郡花園の里に在て、七星山妙見寺といふと。思ふに花園里、いつの頃しかいひけむ、和名にも見へず後人道して謹忠と云。

○川東前橋故城 永祿の頃、長尾彈正景連居る、後人道して謹忠と云。按に、前橋中世厩橋と書く、則古への利刈驛の轉じたるなるべし。此邊は東鑑に見えたる河內の鄉なるべし。今河內村存す、其外天川原・前代田・公田・六供・市坪・矢島・横手などの村は皆群馬郡とすべし。朝倉・德丸は那波郡の轉したる也。

○賴朝の墓 河內村極樂寺の境內にあり、未詳。

○和田故城 今高崎と改む 和田氏居二于此一、和田系譜に據に、和田義盛の六男六郎兵衞義信、和田合戰の時、遯れて上野國に蟄居す、其子正信、人皇八十七代後嵯峨院の寬元年中、爲父祖一寺を建立して興禪寺と號す。其子上野介信胤より九代右兵衞太夫信輝に至て、世々和田城主也。信輝上杉家に屬て川越合戰に討死す。其子兵部少輔業繁は武田家に附て、遠州長篠合戰に討死す。二男越中守正盛、下の城に據る、業繁の子信業は右兵衞太夫と號す、實は跡部大炊助勝資の嫡子也と云。開山は寧一山にして新田氏光の建立と云、寺中に大鐘あり。○慈眼寺 瀧村にあり、花敷山多樂院と號す、眞言古義 法相良辨建立と云。其後足利尊氏公再建と云へり（護國寺 上並榎村にあり新比叡山天龍護國寺と云、天臺宗 元は船尾山にあり 文明十八年、傳て慈覺大師の開基也と云。寺の額は小野道風の筆也。 ○柳澤寺 天臺宗、山子田村にあり。後知足院關白房嗣公の息道興、回國雜記に、俗書也といへども據とす。 ○大藏坊 本山山伏、引間村にあり。文明年中、聖護院宮入給ふ室、今に存す。

安蘇山 マソマリ村

萬葉 かみつけの安蘇山つゝら野をひろみはひにしものをあせかたへせん

全 上つけのあその麻そむらかきむたきぬれとあかぬをあとかあかせん

新六帖 我戀はあそ山もとの青つゞら夏野をひろみいまさかりなり 爲家

按に安蘇山、上野・肥後・同名也。新六帖の歌、或抄に肥後とす、然れども萬葉既に山つゞらを讀しからに此歌の作例、上毛の部と見るべきかてぬ妹か家のあたり。安曾の地名絕て久し、今莇に山子田村の邊古桃井鄉也。船尾山あり、是は箕輪軍記てふものに北は安蘇山相馬の麓、桃井の原と見えたり。箕輪記、俗書也といへども據とす。

伊香保根

萬葉國歌 かみつけの伊可抱の禰呂にふる雪のゆきすきかてぬ妹か家のあたり

夫木 くちなしにさしたる雲のかゝれるはいかほの根呂に雪や降らし

いかほ風

萬葉　伊かほ風ふく日ふかぬ日ありといへど我戀のみしときなかりけり

いかほ風今朝は吹とけさへ〳〵しまゝの井筒にたかへすかれり　肖柏

按に萬葉いかほ風といふ事、今も此國伊賀保の嶺より吹下す風のいと烈しければ、あかれる世のさまも思ひやられ侍る。

沼

萬葉　かみつけの伊香ほの沼にうへこなきかく戀ひんとやたねもとめけん

拾遺　いかほろやいかほの沼のいかにして戀しき人をいまひと目見ん　よみ人不知

かくれなみあはすなりせばみちのくのいかほの沼のわれいかにせん　赤人

東路のいかほの沼の杜若袖のつまよりいろことに見ゆ　顯仲

から衣かゝるいかほの沼水にけふは玉ぬく菖蒲をぞひく　定家

まこも刈伊香保の沼のいかばかり波越つらんさみだれの頃　順徳院

按に今榛名の沼と云もの是也（のとぬは同音也）或抄、此沼は請雨使立し處といへり。

式内伊加保神社大月並椿名神社小等說

按に、伊香保神社は、延喜式に名神大社にして、月次の奉幣ある宮居也。椿名（ツバキナ）の神社は小社にて月次の例幣も無之、然るを今、一山をすべて椿名の山とし、且椿の字を榛に作るはいかゝぞや。されば今の人、凡温泉の地のみ伊香保と思へり、中世何れの御時かくなりけん。式・萬葉の哥等によりて見れば、今の榛名山は都て上古の伊香保山といひしなるべし。（榛名より下す風をいかほ風とし、今の沼をいかほ沼と云にても知べし。）扨伊香保・椿名の兩社は皆一所に有しと見ゆ、いかにといふに上古大社には必ず御贄（ミニエ）の封戸（フコ）を寄られし事なり、今の神戸（ガウト）村、是伊香保の神の御贄（ヲンベ）なるべし、小社には封戸有し例も見えざれば也、かくて伊香保の神名、轉じて椿名（ハルナ）にかたつき、今それさへ榛名（ハリナ）と書也。又思ふに里宮は上古は麓の村にありしなるべし、扨古道は猶箕輪口なるべし（按に善地・宮澤などいふ里、又箕輪に椿名山など云處あり。）

榛名神社

圭田山中方三里、別當岩殿寺滿行院、天台宗東叡山兼帶、坊中百余坊。

祭神滿行大權現と號す、神社本紀、背野國秦名神祠、高岳天皇時、元湯彦大神鎭坐と云々。又先レ是檀原宮天皇時。與二父神美眞道大神一、伏二夷賊一、亦戰二大力神一、威二殺之一と云々。（按に國史、元湯彦命は、天照大神五代の孫也、舊事紀、事湯彦に作る。是物部氏遠祖也と云、）○此山往古は繁昌の地にて三千百坊あり、座主快忠・快尊・或は中納言法印大僧正賴印などといふ人、管領せしが、其後應安の頃より戰國と成て、衆徒等戰負て廢せしを、慶長十九年九月、一山の衆徒慈眼大師に奉しより、永く天台宗になれりとぞ。

黒髪山

新流古今　ぬば玉のくろ髪山を朝こえて木の下露にぬれにけるかな　人丸

堀河百首　うば玉のくろ髪山のいただきは雪もつもらばしらがとや見む　基俊

按にくろかみ山、下野とすれば論ひに及ず、今こゝに黒髪山と唱ふるものは、宗祇の國分によりていふなるべし、然れば誤にもせよ、既に久しき說なればしばらく愛にしるしぬ、今そうまが嶽有り、土人是を黒髪山といふ也。○石垣山　萬葉集石垣沼、又伊香保沼の美名也とも云○龍躰院墓（湖水のかたはらに有、昔木部村の城主を木部彈正と云、その室こゝに遊て、湖水に入て龍になりしといふ。按に木部は其先蒲冠者源範頼より出で、子孫關東古河公方成氏について、當國木部村に居る、蓋其人の室なるべし。）

物聞山

夫木　いかほなる物きゝ山のほとゝぎすにごらぬことに聞ゆなるかな　伊勢

懐中抄　いかほなる百聞やまの谷水の濁らぬ音になかそふるかな

按に上の歌は上野とす、今温泉地の東南の山をしかいふ也、下のうたは近江の國とす、思ふ伊香郡（イカゴ）に有る山なるべし、似し事なればこゝに出す。

伊加保神社

伊香保山に坐す、今温泉有て繁花の地也、むかしは有馬村に屬すといふ。

祭神未詳。或是元湯彦命歟、亦は元湯彦は椿名の神社なるや、たしかなる事わきがたし、猶後人の考を待べし。

若伊加保神社　其地未詳

上野史の說に、伊香保は今の伊香保（温泉の地なり）是なるべしといふ。是予が按ずる處と符を合せて實にさる事なるべし。此段上にもいふ如く、上古の伊香保山は今の椿名也、扨其地に二社、伊香保・椿名とありしを、何の頃よりか伊香保の名、社をも山をも椿名とのみ云來れるなるべし。扨此若伊香保こそ今温泉の地に祭る宮居なるべし。思ふにいま有馬村にまつる。

○伊加保溫泉

新撰風土記抄に、人皇十一代垂仁天皇の御宇に湧出る云々。一說、白井城長尾氏の臣・島田・岸・千木良等、五人にて取建しともいふ。右當地大屋共の祖なりといふ。

予ひとゝせ伊加保に浴して遙に千嶽を攀ぢ、湖南に遊歷して青天を濯き、向ひに列岳そびゆ、是を案内に問へば、硯が嶽・不二が嶽・鬢櫛（ビンクシ）が嶽・烏帽子山・蛇嶽抔いふて、又東に二ツ嶽・總嶽が嶽（黒かみ山と云）嶮峻なり。社頭は是より西南に下りて、磐石の中に巖然たり、こゝに元湯彦神を齋く、左右列峯恰も屏風を立つるか如し。思ふにいにしかほは怒穗（イカホ）の略ならんか、雷をいかづちといひ、怒をいかりといふも、皆するど（ルナ）きをいひて例多し。又椿名と云事はいかならん、上古はすべて椿（ツバキ）名と云ふ也、是は借字にてちばき根の意なるならんか、名は根に通ひて嶺（ネ）也、知波木根とはいちはやき嶺と云ふ事也、いちはやき・うちはやき抔同義にて、稜威（イヅ）疾き意ならん、稜威とは物の猛（タケキ）をいふ也。然れば是も彼の伊加保と同意なるべし、いかれるさまは猛なるものなれば也。

萬葉十四　いかほろにあまくもいつぎかぬまつくひとゝをたはふいさねしめとら

子持山

六帖　子もち山わかかへるてのもみつまてねんと思ふを妹はいかにぞ　忠房

子持緣起　子もち山谷ふところに生たてゝ木々のはこくむ花をこそみれ　姉小路濟繼

按に子持山、哥書に國知れずとす、或陸奥といふ、今こゝに子持山有て濟繼の詠歌もて據とすればこゝに記す。按に濟繼は小一條左大臣師尹公の孫、權中納言基綱の子也、參議從三位、法名常濟といふ。

○兒持神祠

兒持山に在り

神社本紀、安閑天皇時、磐筒女大神鎭坐云々。圭田二十石　按に子持緣起云、夫當社は人皇十二代景行天皇の御宇、日本武尊、東夷征伐の時、迹を垂給ふ靈場也。祇岩神社と申、吾妻權現と云。亦地主は山王權現にして、又神吾津木花開耶姫神（カンアヅミツマリヤス）鎭座宮所也といへり。五十二代嵯峨天皇の后檀林皇后、太子なき事を患ひ給ひしに、感應空しからず、皇子降誕したまふ。仁明天皇是也。依て今の世、世繼なきもの祈誓すれば必ず驗益を蒙る者多し、よつて子持の名ありといへり。天文の頃、上杉氏吉里、對馬守小代官森文六郎等をして修造す、又武田信玄も修造すと云。

○白井故城

長尾四郎右衞門景春居二干此一　後入道す、名伊玄居士

尾次郎景弘より出て、建長四年宗尊親王將軍に任じ給ひ、鎌倉御下向の時、附添人として關東に下る、是長尾四郎大夫景煕か時也、此時勅を以て上野國白井を賜る云々。正元元年卒、相州藤澤道場淸淨光寺に葬る。是より代々上野に住して後、建武の頃より上杉氏の內管領と成、白井・足利・惣社の三家となる。右長尾氏過去帳の大意。按に白井長尾は、其先鎭守府將軍平忠通の裔、長

○雙林寺　最大山と號す、曹洞宗、寺領五十石、白井中郷に在り。按に當寺は信濃・越後・佐渡・上野四箇國僧錄司也。開山を月江正文と云、寶德二年長尾左衛門尉平景仲入道昌賢建立と云ふ。忠度鞭樓　寺中に有り、由來未詳。○鎌倉權五郎景政塔　白井吹屋空惠寺に有り。賴朝塔　同所に有り。○脇屋義助塔　金井村金藏寺に有り。

和名鈔吾妻郡　鄉名三　長田奈加太　伊參伊佐滿　大田於保太

○長田　廢　いまだ詳ならず、今試にいはゞ長井村抔にや、此地猿ヶ京の奥につゞく須川・布施町の邊に求むべきか　亦一には長野原村有、いづれか定めがたし　○伊參　按に今の伊勢町是なるべし、伊佐萬と伊勢萬知は、音便にて轉じたるならん、伊は言發す語にて、佐萬は谷の義か　皇極紀に、谷を云ニ波佐麻一　名田の字は助字多し、神武紀に　天皇八十梟師を討奉ふ條に　皇師立詰之處（タテツシ）、是謂ニ猛田一、作レ城處號曰ニ城田一のたぐひ也。田と戸は音便にて大戸なるべし、是木部姓哉、又大戸首抔の戸に出たるべし。續紀に田口朝臣大戸を上野の介にする由見ゆるは、此地に起りし名とも思はれたり。いつの頃よりか浦野氏茲に居る、宗長紀行に大戸といふ所、浦野三河守か宿所にやどるといふ　甲陽軍鑑に、王土十騎と見ゆ、按に大戸は上野名跡の一也、源氏系圖によるに、浦野氏は其先・六孫王經基の二男滿政より出で、島羽院武者所八島冠者重實の子重遠、始め尾張國浦野に住す、依て浦野四郎と號し、信濃守に任じ、又兵庫允に任ず、是浦野氏の始なるべし。

○仙人窟　大戸に有ひ、上古の時、穴に居れり　上古仙人住しなどいふはいかゞにや、思ふに是は上古の穴居なるべし。　日本紀に見えたる土蜘蛛又は吉野山の國栖人のたぐ

予或日河原湯に浴して、大戸の關を過るに、此邊磐石美しく、水無月の頃より、白露疾下り、蔦かつらの黃葉をいそぎたる樣、實に造化の天工といふべし、思ふに往昔大戸之道尊（オホトノヂ）抔や出ませし鄉ならんも知べからず　神代の時、大戸道尊、妹大苫邊尊（オホトマベ）と申す二柱の神を大戸摩彦尊・大戸摩姫尊とも申し、又大富道姉（オホトンヂ）大富邊（オホトンベ）とも申たり、扨白石先生の說に、いにしへの當世は、今の關左の地と見ゆれば、はたこゝに考るのみ。

淺間嶽　上信の堺にあり

伊勢物語　信濃なる淺間のたけにたつ煙遠近人のみやはとかめん

在原業平朝臣

古今俳諧歌　雲はれぬ淺間の山のあさましや人の心を見てこそやまめ

なかき

按に淺間ヶ嶽は、しなのなると業平の詠歌にも見ゆれば、信濃の國たるは勿論也、去れど半より東は皆上毛の隸て、此邊は三原庄といふ也　今淺間の社別當延命寺、上野鎌原にあり　よてしばらく爰に記す、東鑑に建久四年三月廿一日、爲レ覽二下野國那須・信野國三原等一、狩倉今日進發給々々　按に信濃國は誤也、三原は上野也、○曾我物語にいふ、その日はおなし國の三原野をからせらるべきにてそありし　中略　その日のむまのこく、空にはかにくもりてかみなり、あめやう〳〵こぼれ、かさをうるほす、大將どの景秀をめして、きのふあさまのゝ雨は拔なきぬ、又みはらのゝあめこそむねんなれ、歌一首と仰せ下されければ、源太とりあへず、

きのふこそあさまはふらぬけふは又みはらしたまへゆふだちのかみ

按に鎌倉殿御感のあまり、碓氷の麓五百餘町の地を賜るといふ、今狩宿村有、そのかみ狩倉の地なるべし　又同書に、兄弟のもの工藤祐經をねらひ、かりやの宿にやどるとは爰にや　○賴朝社　鎌原村にあり、右大將賴朝卿を祭る。

草津湯

按に草津湯、由來詳ならず、しばらく緣起の說によるに、賴朝卿・三原遊獵の時、此所に入、白想明神の鳥居の前に至て、扈從の人々卷つむるをりから、硫黃の臭煙、叢の中より登りて、雲のたなびきたるが如し頃は建久四年八月三日也、大將奇異の思をなし、當郡の住人御殿之助に仰て、叢を刈らしめ給ふに、溫泉涌出て、いと清し、大將思らく、是必ず病痾を治すべしとて、近侍の士、足利駒王丸病るを入しむるに、病忽に平癒す、大將感じて自らも浴したまひ、此地を永代御殿之助に賜ると云々　賴朝の入る湯を御坐の湯と云　是等の說、據に足らずといへども、今こゝに記して後人の考を待つのみ、貝原篤信、草津はくさ水の義なるべしといへり。

○永錄の頃、近衛龍山公、此地に浴して南無藥師十二神てふ事を、句の上に置て詠歌し給ひ、この藥師堂に奉られしとかや、其和歌左にしるす、

山路新樹　名も知れぬ草木のあまた茂りあひて深き山路やわけ迷ふらん
雨中郭公　村雨の杉たつ山の峯こえてかすかに名のるほとゝぎすかな
海邊夏月　山おろし磯邊の松に吹立て夏なき浪のよする月影
山五月雨　雲は猶かさなる山の遠近もわかぬ計りの五月雨のころ
夏草夕露　しけりあふ草のむら〳〵置露や暮てほたるの色に見ゆらん
馴增戀　しらさりき露の情になら柴のなるゝに袖のぬれんものとは
契後絶戀　うきはたゞ契り置にしねやの戸を明やらぬ夜の人のつれなさ
馴初戀　にくからぬ人にそひ寢のきぬ〳〵は命にかへておしきものかは
旅人友稀　信濃なる木曾路の山のけはしきに行かふ袖もまれの旅人
寄湯祝　むすぶてふこの谷かげの出湯こそむべも老せぬくすり也けれ

編年小史云、正親院永祿三庚申年九月、關白前嗣往二越後一、同年上杉輝虎、發二向關東一、伐二諸城一云々、同書又云、天正十年、藤原前久任二相國一、初名前嗣、後剃髮號二龍山一云々。近衛系圖に據に、晴嗣又名は前嗣、關白植家之子也、從一位關白大政大臣、法名龍山と云々。

○ついていふ、吾妻郡地名、長野・大戸・三島・植栗・金井・岩井・原町・師田・布施町・坪井・大笹・林・松尾・矢倉・澤渡等の地名、皆上古の戸より出しもの多かるべし。羽尾は治尾の牧に出、市城は市代牧に出し成べし。川を隔て（吾妻川也）新巻村有、是荒牧の義なるべし。又群馬郡・小野子・寄島・北牧・南牧杯へもつゞきたる所也。中ノ條の名は、六里を條とすと軍防令に見ゆ、是ら成べし。金井・坪井の類、井の字は水邊の義にあらず、古史・爲・偉・渭の類は音をかり、井・居・座の類は訓を借たり、田居は軍防令に、防人（サキモリ）の田につくを莊舍と云に同しといへり。

志萬峰御湯　堀河島根

堀河夫木又　夜とともにしたにたく火はなけれども志満ねのみゆはたゆるともなし　顯仲

四萬湯三所有（山口・あらゆ・日向）或は四萬根御湯是乎と云々。按に四萬は此國尤も北方の地也。是より五里ばかり山中に越後堺あり、往昔は爰より越後へ通路ありしとて、日向より三里奥に科野といふ驛の趾ありとぞ。

○吾妻郡溫泉　十四　草津湯　也麻湯（信州に加澤の湯と云）　澤渡湯　萬座湯　四萬湯　川中湯　河原湯　小雨湯

入山湯　須賀尾湯　川端湯　湯の宿　須川湯　入須川湯

○宗祇法師國分に、吾つま川、これがつもりてあつま川、一ッは四萬の山中より出、一派は草津より下り、一派は吾嬬山・萬座山・鳥居峠・今白根等の水三ッあり、一ッは四萬の山中より出、一派は草津より下り、一派は吾嬬山・萬座山・鳥居峠・今白根等の水したゞり、流て原町の西に合ひ、東流して白井に至て利根川に入る（此間李の關あり）

○三坂峠　猿ヶ京より越後淺貝へこゆる坂也（信濃にて三國峠と云）

傳へて推古の朝に、大仁鳥臣のひらく地也といへり。

上毛國史に、野背國造、豐浦宮朝、以二鞍作鳥臣一、任定二賜國造一、鳥臣有二神巧一、開レ路起レ圃、理レ湖作レ田云々。亦曰、鳥臣生二三兒一、兄云二龍臣一、中云二木臣一、弟云二雲臣一、三兒皆工也、各有二才利一、龍臣妙レ利レ民、故任二陸奥尾張國一（中略）雲臣任二野背國一。在二北南國間一、治二前後國民一、木臣奉二工部一、常事二朝廷一云々。按に國史の說、出る所詳ならずといへども、しばらく此に記す。國史又曰、神社本紀、椿名・兒持・二社、以レ爲レ在二野背國一、則今群馬郡北畔、及吾妻郡者、古之所レ謂野背國一、不レ知二何時合爲二一國一耶云々。思ふに是等の說・舊事記・古事記・日本紀等にもいまだ見えざる處也（舊事記國造本紀にも、山背國石背國と見ゆれども、野背國は見え侍らず、神社本紀の說いといぶかし）　上毛野國は、既に毛猿島王の封られ給ふ地にして、亦外にかゝる國の有べしとも思はれず。

○圓通廢寺（青山村に有、五山派の寺也と云）　未詳　○善導寺（原町に有）　いともふりたる寺也　○顯德寺（原町にあり）　○應永寺（岩下村に有）

○岩櫃故城　其先詳ならず。永祿十年眞田持、海野長門を置と云。按に信濃佐久郡に、延喜の頃より滋

野氏繁蔭す、其流・海野・望月・根津・小室のたぐひ、又當郡佐久に隣るによって、其流等畧本郡に移住す
鎌原・西窪・羽尾等也

○河内守賴信二男、井上賴清の孫、村上判官代基國子親基、吾妻五郎と云、本郡に出たるべし、此地信濃に隣れば也。又藤氏系圖に、田原藤太秀郷の後裔、大田太郎行政が三男兼助（一本には淵名兼行の兄とす）吾妻權守と號し、便左衛門尉上野介に任ず、其子吾妻權守兼成など見ゆ、皆本郡に起りしなるべし。

○宗長・上野より越後の國へこゆるとて、三國にかゝりけるに、諏方の社を拜して、

諏方の海ねさとちらさば三國山こゑの紅葉も神やをしまん

○長刀坂　道興の記に、相般湯のくちといふ所より、長刀坂にかゝるとは右いふ近くなるべし。

杖をだにおもしと厭ふ山超えて長刀坂を手ふりにぞ行く

神廟　凡此條は予が知れるものをのせて後人の考を待つ

○碓氷郡

○熊野權現社　碓氷嶺に在り　○八幡神祠　板鼻に在り

○片岡郡

○小祝神社　延喜式小、石原村に在り　○家隆神祠　乘附村に在り

○甘樂郡

○貫前神社　延喜式、名神大。按に今抜鉾社と云、續日本紀、元年巳卯正月廿七日甲申、授上野國正五位下勳八等貫前神社從四位上。同四年四月廿五日戊寅、授上野國正四位勳八等貫前神社正四位上。同十八年夏四月十日丁酉、授上野國從四位上貫前神社正四位下。元慶三年閏十月四日庚寅、授上野國從四位上貫前神社從三位勳七等云々。鐘銘曰、甘樂郡抜鉾大明神、延喜式所謂貫前神是也。磯部氏世掌祭祀、稱德帝天平神護二歳、賜物部公姓。清和帝貞觀元年加授神位、其後階勳累遷、遂推崇爲此州第一宮云々。　○波古曾神祠　式外。三代實錄、貞觀十七年授上野國正六位上波古曾神從五位下。元慶三年閏十月四日庚寅、授上野國波巳曾神從五位上。同四年上野國正五位上波巳曾神正五位上勳十二等云々。　○丹生神祠　三代實錄、貞觀十七年授上野國正六位上丹生神從五位下云々　○宇藝神社　延喜式に、神成村に有り

○若伊賀保神社　貞觀五年十月七日丙寅、授上野國從六位上若伊賀保神社從五位下。元慶三年閏十月廿六日壬午、授上野國正五位下。同四年上野國從五位下若伊賀保神社正五位上。同五年十月廿一日己酉、授上野國正五位上若伊賀保神社從四位下。同十一年十二月廿五日戊申、授上野國從四位下若伊賀保神社正四位下。延喜式小　○椿名神社　延喜式小　○妙見神祠　引間村に在り　○惣社　惣社村に在り　○烏内子神祠　稻荷と云、小塙村に在り　○午頭天王神祠　柴崎村に在り　○鏡大明神祠　中尾村に在り　○今宮祠　柏木澤に在り　○定家祠　佐野に在り　○倉賀野八幡　○前橋八幡　○甲波宿禰神社　延喜式小、川島村に在り、續日本紀承和十三年八月辛巳、奉授上野國甲波宿禰神列官社云々。貞觀九年六月廿日丁亥、授上野國從五位下甲波宿禰神從五位上。三代實錄貞觀十一年十二月廿五日戊寅、授從四位下云々　○多胡郡　○辛科神社　○緑野郡　○鬼石神祠　平親王將門祭る　○栗栖神明　○土師神祠　本鄉村に在り　○那波郡　○倭文神社　延喜式　○火雷神社　延喜式　○連取天神祠　連取　○吾妻郡　○諏方神祠　須賀尾に在り　○百頭目神祠　金井村に在り　○飯玉神祠　小泉村に在り　○玉村八幡祠　○利根郡　○保鷹神祠　○河内神祠　○八掬脛神祠　○白根權現　草津　○勢多郡　○赤城神社　延喜式名神大。續日本紀永和六年六月甲申、奉授上野國正六位小高神從五位下。同十一年十二月二十五日戊申、授上野國正五位下赤城神正五位下云々。授上野國從五位下赤城神正五位上。同十六年三月十四日癸酉、授從四位下　○二ノ宮神祠　二ノ宮村に在り　○近戸神祠　大胡町に在り　○箱田神祠　箱田村に在り　○小高神祠　絲井村に在り　○群馬郡　○伊加保神社　延喜式名神大、續紀承和二年九月辛未、以上野國群馬郡伊賀保神從五位下云々。三代實錄貞觀九年六月廿日丁酉、授從四位下。元慶四年五月廿五日戊寅、從四位上云々。　○大國神社　延喜式小、淵名村に在り　○新田義興祠　長樂寺に在り　○熊埜祠　熊野村に在り　○賀茂神社　延喜式　○美和神社　延喜式　○桐生天神祠　三代實錄貞觀五年五月九日辛未、授上野國正六位小高神從五位下云々。　○栗生權現祠　下田澤に在り、栗生左衛門を祭る。　○山田郡　○邑樂郡　○長良神祠　○館林加法師稻荷祠　○木曾神祠　今井村に在り　○產泰祠　大屋

追加

○三坂峠神祠（三國に在り）　○淺間大權現（上野信乃國境）　○荒舟神祠（荒舟山甘樂）　○稻含神社（三代實錄元慶四年五月廿五日戊寅、授上野國正六位上稻裏地神從五位下勳十二等云々、是にや）　○妙喜大權現祠（白雲山に在り）　○小松大明神祠（富岡）　○小幡八幡（小幡）　○今宮（上野村に在り）　○飛總神祠（中澤）　○菅原天神祠（以上、皆甘樂）　○鷺宮大神宮（碓氷）　○安中八幡（同）　○戸榛名祠（群馬）　○飯玉祠（倉賀野）　○赤坂神祠（群馬）　○山名八幡（綠野）　○平井秋葉祠（同上）

上野名跡考（下）

上野國群馬郡防人　富岡正忠撰

刀禰河泊

萬葉十四　刀禰河泊（トネカハノカハセ）及可波世毛（モシラズタダワタリナミニアフノスフベヘルキミカモ）思良受多多和多里奈美爾安布能須安敞流伎美可母

新勅撰　笹わけは袖こそぬれめと年川の石はふむともいさ河原より

家集　利根川の底はにごりてうへ澄て見えけるものをさねて悔しき

夫木　とね川の河原を行は小夜千鳥石ふむ道に落かへりなく

刀禰川は（刀寧川に作るは唐文字によるなるべし。）利根郡富士山の西に出づ、始はわづかに此邊の列岳雫流落て、吾妻・利根の堺目をくだり、小川・月夜野に至て、又藤原谷の澗水をまじへ、沼田にうすね川を落し、戸鹿野に片品川を合せて、又白井に至て吾妻川西より合ふ（すべてとね川といふは蓋水源に因なり。）かくて勢多・群馬の間を過て、那波に至て神流川・から す川を會し、佐位・新田・邑樂の南部にわたり、武藏・下總を堺ひ、都て利根川といふ、銚子に及てついに東海にそゝぐ。

仲遠　實方　公朝　堯惠

○北國紀行にいふ、文明十九年十一月二十七日、山雪にむかひ、朝立侍り、と年川を遙に見侍りて、

降つみし雪の光やさそふらん浪より明る天の刀禰川

野史曰、推古天皇十五年秋、大仁鳥臣至二上野一、治二利根海一、見二海狀一、乃割二戸河瀧磐一、高二十丈一、厚一百歩、暴蛟忿荒、洪水漲流、爰鳥臣、廻二妙工一、敢不レ損二亡一人一、遂治レ水爲レ陸、得二良田一萬七千八百一、人言、神工不レ勝二人工一、毒蛟尙逼二深淵一、知二鳥臣出議一、欲レ食二鳥臣一、忽有二神人一、切二殺毒蛟一、開二三國路一、直入二雁越一云々。或說、この神人は諏方神也、是より先鳥臣諏方に至るに、神の告有て、汝を助くべきよ

し宣へり、此故に今沼田及吾妻の内に、村毎諏訪社を齊ぐと云々。又戸鹿野は戸河瀧磐是也と云々。是らの說いと覺束なし、一說、戸河瀧岩は下總也といへり。

比刀禰川

懷中抄　都よりたづねくる萬の里人はひとね川をやわたらざるらん

按に、ひとねといひ、とねといふ、同義なるべし、譬ば信州に小田井・比田井の名有るが如し、又泊瀨・小泊瀨といふたぐひ、古歌に多し。今前橋に、利根の支流を號て、しかいへる川有り。

和名抄利根郡

鄕名四　渭田（奴末太）　男信（奈萬之奈）　笠科（加佐之奈）　呉桃（奈久留美）

○渭田　今沼田に作る。此郡上古、利根海を治る抔とも聞え、又茲に沼峠抔ありて、尾瀨沼てふも見ゆれば（駒ケ嶽の東に有り上毛越後・陸奥の國境とす）かゝるたぐひより出たる名なるべし、今沼田有は後にいふと聞えたり。○男信（ナマ）　廢るきて、楢てふ村見ゆ、信は階阪（シナサカ）ある地也。（生梨・成楠等の字皆ナラスの訓也）轉なるべし。崇神紀、大和國笠縫邑を初め、笠木・笠原・小笠原抔の類、皆其地の產物に出しか、又は笠朝臣の姓などに起りしも有ぬべし。○呉桃　文祿年中、名呉桃堡壘の一件によて、豐臣大閤・小田原の大事も猪俣氏の輕躁によるとかや、茲に利根郡三庄といふ事有り、庄田庄・拜四庄・片品庄となす、又は藤原庄とも聞えたり。今新巻村三ヶ所に山王を齋ひ、毎歲九月中の九日祭也、此日先辰の刻、羽場下の神祠を祭り午の刻、要害内の山王、申の刻、高見屋の上の山王、戌の刻、相俣石神の祭也。上人是を拜四の庄と云。按に、延喜年中、左馬寮に見えたる拜志牧（ヘヤシノ）、則ち是なるべし。（二牧原・羽場・荒牧・上牧・下牧・馬場・政所の類、皆古牧に出たるべし）○ついていふ、此邊地名、佐山は狹山、師田は毛呂・藤原・金井・岡谷・中野等は尸なるべし。尾合・久屋などは、久野の牧に出しなるべし。

○沼田故城

沼田氏茲に居る、世々上野の名跡也といへども、其始祖未詳ならす、壽永年中、緒方三郎大神惟榮、源氏に屬して功ありしが、其後義經に與する聞へ有て、建久七年波多野四郎太夫能成に預られ上州利根郡に流され、配所にて三郎惟泰を設けたり、是より戸上に住して、沼田と號すともいへり。一說大友左近將監能直の子、利根二郎親秀あり、是利根氏にて沼田の祖なるべしともいふ。按に沼田系譜に、沼田氏は其先三浦大介義明より出たり、其子矢部別當義澄、其子若狹守泰村、二男三浦勘解由左衛門景泰利根郡庄田に住して沼田と號す、（法名龍花院と云。）其子三郎景長、其子景盛、其子太郎景繼、二男景家を岡谷の祖とし、三男景宗を發知三郎といふ、太郎景繼が子、上野介景繁、其子景久に五子あり、嫡子上野介景光、二男小川二郎景秋、三男吳桃三郎景冬、四男川田四郎景信、五男石住五郎泰久也。景光四代を泰輝と云、號二龍雲齋一、其子萬鬼齋入道顯泰、四男一女あり、嫡子三郎憲泰、二男赤見六郎綱泰、三男彌七郎朝憲、季子は平八郎景義也。女子は安中越前守憲家妻とす。（景義・倉內城に討死して沼田氏亡ぶと云。）○加葉山龍華院彌勒寺（發知村に在り）始祖圓仁慈覺大師開闢とす、檀越一品葛原親王なりと傳ふ。三代實錄、承和五年正月壬申、一品葛原親王、爲二兼上野大守一由見えたるを以て、此に一院を立られしものならん。

○保鷹山（花咲村入鈴岳を云）保鷹神祠あり、元は利根うすねの水派に有しを、沼田景時その地を城として、今の地に移轉す、傳て倭武尊を祭ると云、（鳳世のときは大峯とて、東國の山伏修行すとて、高平村の內笹野といふ所に、入峰初門の道場ありとぞ）　按に、吾妻・利根・二郡の間、倭武の祠尤多し、思ふに此地越後に隣る、吉備武彥抔至りし地なるべし。日本紀、尊逮二碓日坂一、於レ是分レ道、遣二吉備武彥于越國一、監二察其地形民俗一云々。（此所に土人武尊山の名所といふあり　清心嶽・西保鷹・中嶽・奥嶽・香嶽・利根水源・溫泉花たけ・茶臼嶽）

○八掬脛祠（後閑村にあり）傳云、天喜・康平の間、源頼義、奥州安倍貞任・高宗、任レ挑戰時、貞任族（或曰惟任）籠二居上州尾瀨谷窟一、頼義朝臣、於二利根郡一勸二請八幡一、誓願レ退二敵軍一、神甚見二奇瑞一、而後陷二尾瀨窟一、安倍殘黨、尙在二三峯山之岩窟一、劫二掠人民一、賊出二入岩窟一、以二藤繩一、後人奇祀レ之云々。國史云、日本紀に越後風土記を引て、美麻紀天皇御世、越國有レ人、名二八掬脛一、其脛長八掬、多力大強、是出雲之後也、其屬類多云々。沼田越後と相接す、蓋此なるべしといへり。思ふに上古八

掬脛・七掬脛・土蜘蛛・熊襲・國柄人の額、無位なる者の人名に多しと見ゆ。

○利根郡溫泉六　川上湯　寶河湯　老神湯　東小川湯　谷河湯　河端湯　湯小屋　湯檜曾湯。

○河内神祠　又三峯といふ、所謂三峯は追母峯・吹返峯・後閑峯也。玆に神祠を齋ぐ、所祭詳ならず、一說河内御坊を祭る（河内御坊未詳）又凡河内躬恒也ともいひ、三輪の神也ともいへり。

○兒持社　屋形原村笹尾にあり、兒持山は群馬郡なり。

○片品川　は利根・勢多・二郡の境目をくだる、沼田より東へ上り、小松といふ所あり、是より北東へ郡界有て、川上は又小松より南川向に根利てふ村有り、此邊群山の下滴を濫觴とす、又片品の一派の水源は尾瀬の南よりも出て、戸倉土村をへて老神にいたる、此川端に御座入の名有り、士人の說に、奈良の朝、左遷の人有て、こゝに居るといへり。○花咲村に觀音堂あり、堂の傍に岩に花咲しとて名あり、瓊瓊杵尊に、慈利縣武口塞、石上有レ花、如三堆心牡丹一、枝葉繞々雖下精三於書一者上、莫三能及一と見ゆ。按に刀禰は東北會津につゞき、北は越後につらなり、南は赤木・子持の兩岳を帶て、實に隱國の地といひつべし。神社本紀に、利根・吾妻・及群馬の北畔、上古野背國なるを、何れの御時合せられしか、未詳ならずといへり。是らの說いと覺束なしといへども、しばらく玆にしるして、後人の考を待のみ。

○舊事記にも、未だ野背の國は見え侍らず、道口木閉ノ國抔や、かゝる地ならんか。又同記天孫降臨の條に舍人物部見ゆ、或說に神代の時、常世の國とは、今の關左の地の惣名なるべきよしも見えたれば、彼舍人物部も、此郡に起りしものか。姓氏錄に河内國の神別に等禰連は、椎根津彥の後也と云々。

久路保根呂

萬葉十四　かみつけのくろほのねろのくす葉かたかなしけ兒らにいやさかりくも

按に黑保の峯呂、未詳ならず、此に赤木山あり、最高峯を黑檜山と云、今思ふに久呂比・久呂保ともに、波比布倍保の音もて通へるなるべし。扨此の歌の意を思ふに、葛葉の如くかなしき妹に遠ざかる事を、彼峯呂のいや高く遠にとりて擧げしものにや、猶後人にとふべし。

赤木山

夫木未勘　萬代にあかぎの山の白椿君がさかゆく卯杖にぞきる　讀人不知

東鑑云、建長三年四月十九日、上野國赤木嶽燒、爲三先例兵革兆一之由、令三彼國在廳等申一レ也云々。（山中の人むかしやけたる所は今の荒山にて、溫泉はその餘りなりといへり。）承平の軍記に、相馬小次郎將門、土浦城を攻め、叔父國香を亡し、下野の國を打なびけ、上野國へ打越て、高木山に陣を取る云々。（今昔物語には、上野介藤原忠範が印鑑をうばふと見へたり）按に赤城は（赤木共云ふ）此山の總名にて、荒山（又小路山ともいへり。）鍋割山・地藏嶽・篤嶽・佐々倉山・前山・和久士也、鷹山・永倉山・鳥帽子岳等あり。

石垣沼（又石垣溜と云。石と岩とは適用。）

拾遺　奥山の石垣沼の水こもりに戀やわたらんあふよしをなみ　人丸

後拾遺　ひき捨る石垣沼の菖蒲草思ひしらすもけふにあふ哉　小辨

千載　おく山の石垣沼のうきぬなは深き戀路に何みたるらん　俊成

新勅撰　いく千代といはかき沼のあやめ草長きためしに今日やひくらん　入道前太政大臣

續古今　たつのゐる石垣沼の菖蒲草契てひかん君かためには　春宮大夫師賴

新拾遺　朽ねたゝ石垣沼のあやめくさうき水こもりは知人もなし　源經氏

新續古今　さても猶石垣沼のあやめくさあやめも知らぬ袖の玉水　後鳥羽院

按に石垣沼、上野とす、此に大沼有り、東西十餘町、南北六町あまり、沼中有レ洲名二小島一、相傳て石垣沼是也といへり。思ふに石垣沼、又石垣淵ともいふなるべし。人麿の歌に、眞祖鏡雖見言哉たまきはる石垣淵のかくれたる妻抔よめり。

赤城神社

夫木集　上野のすだの赤城のからやしろやまとにいかて跡をたれけむ　鎌倉右大臣

按にから社といふ事、未詳ならず。或は韓(カラ)社は社號歟、韓國の神を祭るにあらずと云々。一說、赤城は赤色也、廣輿記に、赤城山は天台山也、石皆赤色、壁立如レ城と云々。文撰天台賦に、赤城霞如立と見ゆ。卓氏藻林に、赤城有レ二、一は在二平凉府崇信縣一、一は在二萬全都司城北一云々。今此歌、文撰などによられしものか(すだとは勢多也。)延喜式、赤城神社(名神大)先代舊事本紀、金橋宮天皇(用明帝)時、盤筒男大神出現鎭座云々。(一說、大巳貴大神云々)

(覺滿大菩薩と云說に付、緣記に妄說有り、爰にとらず。)

舊事紀に、高皇產靈尊、更會二諸神一、選下當レ遣二於葦原中國一者上、僉曰、磐裂根裂子、磐筒男・磐筒女所レ生之子、經津主神、是將レ佳云々。按に經津主神は、當國一宮とし、又國府惣社に祭る所、磐筒男・磐筒女・經津主の三神なれば、上古神代の時より、久しく此國に鎭座(シヅマリマス)神なるべし。

續日本紀、承和六年六月甲申、奉レ授二上野國无位赤城神從五位下一云々。今按に里宮は、赤城山下三夜澤(ミヤサハ)に有り(圭田五十石、東の宮は神主奈良原氏、祀祠官十六人。西の宮は增田氏、祠官五人)

又山上の社は大沼東に有り(社を大堂と云ふ。)別當代田山法門院壽延寺、群馬郡前橋代田村に有り(前代田と云、寺は今柿宮村に有、天台宗長樂寺末也。)

○攝社　日神・月神・飛鳥社五社(山神・稻荷・雷神・蚣神・水神。)大塔寮社・鴨島辨天社・同蟹宮・本地堂(千手觀音)開山堂・沼尻藥師・小沼虛空藏・地藏堂・午王堂等あり。

○勢多郡溫泉一　三夜澤湯　○按に赤城は背向(ソカヒ)に刀禰郡を負ひ、山脉陸羽に(陸奥出羽)につゞきて、東は斜に日光に境ひ、山勢險峻(サカシ)く、郡中に秀出す、千早振神世の時、二荒神(今日光に作る)と中の湖(中禪寺の湖也)を爭ひ戰ふと聞えたるも又久しき俗談なるべし。

横野

萬葉　紫の根はふよこ野の春の野に君をかけつゝうくひすぞなく　讀人不知

新續古今　紫の根はふよこ野のつぼすみれ眞袖につまん色もむつまじ　俊成

猶碓氷にもいへり、爰に赤城の南及西の下野(すその)の曠野(あらの)六十里斗(古制也)の地有り、むらさきの根はふよこ野てふ此所也ともいへり。一說、武藏國多摩の横野あり、殊更に紫生る所也、此草自然に生ずるは横にはふ種にて植たるは眞直也、紫をよみし歌とも、武藏に可二治定一歟といふ、思ふに上野又紫草を貢事、式に見ゆればあながち武藏ともいふべからず、歌書上野とする事又久し。

○近戸神祠(大胡に有)　大胡氏祠る處也、所祭赤城神也、江戸牛込にも赤城神祠有といふ、むかし上野國に大胡常陸といふ者有り、赤城を深く信じ、大胡に勸請して近戸明神とす、當社は其大胡常陸の孫・牛込氏、上野の社を移して、牛込の鎭守となすといへり。

○二宮神祠　所祭國常立尊・大國主命と云、又赤城二ノ宮也ともいへり、後冷泉院の勅願所にして、其後源賴朝の建立也とかや。(又上卷に見ゆ)

○小高神祠(絲井村にあり)　三代實錄、貞觀五年五月九日辛未、授二上野國正六位上小高神從五位下一云々。

○和名鈔勢多郡

鄕名九　深田　田邑(多無良廢す田室村是乎)　芳賀(波加)　桂萱(加以加也)　眞壁(萬加倍)　深渠(布加無曾)　深澤(布加佐波)　時澤　藤澤(布知佐波)

○深田　廢　詳ならず。今の箱田村抔、彼の鄕の遺名なるにや○芳賀　按に端氣村有り、是波加の轉なるべし○桂萱　すたれ、片貝あり、是にや猶尋ぬべし○眞壁　村なほ存す、是眞髮(マカン)部の略也、眞髮部は天穗日命之後也、又眞髮部は元白髮部なるを、白髮部は光仁帝の御諱なる故に、改て眞髮部とするよし、國史に見えたり○深渠　廢て詳ならず、按に今溝呂木村有り是にや、深渠の轉なるべし○深澤　今神梅・宿廻の邊・都て是を深澤といふ○時澤　詳ならず、地利を押に深澤につゞきたるべし、されば今の室澤村の邊に求むべきにや○藤澤　廢、盡く押極むべからずといへども、是又時澤につゝきて、大胡・柏倉の入より下る、泉澤其地なるべしと思はるゝ也。(郡中赤木の下回に連りて、澤の地名尤多く、其大体如此か)

○ついていふ當郡地名眞壁・鳥取（トリ）・田口・引田・石井・勝澤（ツル）・小吳・小出上・野中・大屋・女淵・膳・小林・武井・山上萩原・田村のたぐひ、姓戸の轉じたるなるべし、座間村有り波佐末の上略なるべし。（谷を訓波狹万）神戸は赤城神社の封戸なるべし、女淵は南淵の姓なるべし。三代實錄・元慶二年三月出羽國夷俘囚判亂、四月敕二上野下野等國一、各發二兵一千一、是時上野國押領使權大掾南淵秋郷等有二戰功一と云々○田口村の地名、氏とする者多し、姓氏錄田口朝臣は武内宿禰の後也と見え、續紀和銅二年三月、田口朝臣益人、爲二上野守一と云々。又萬葉集田口益人大夫、任二上野國司一、時至二駿河國淨見埼一、作歌二首一、いほはらの清見が埼と云々、かゝるたぐひに出たる地名なるべし。

○大屋村（又大室に作る）　産泰の社、此地いと神さびたり、藤原系圖に、『武藏守田原藤太秀郷五代淵名龍行三子あり嫡子は足利成行・二男佐貫行房・三男長沼大夫孝綱・其子秀基號二大屋一、任二美濃守一、其子秀忠が孫、大屋能登守秀康、承久の兵亂院方へ來り惣大將軍と成る、負て河内國佐良において自害す云々。按に山上・大胡・大屋等は上野の住人也、此地に起りたるべし。

○大胡故城　は秀郷六代大胡太郎重俊、居二于此一號二大胡一、其子大胡二郎成家早世して弟成近を嗣とす、成近が子隆義・其子實秀は法然上人を飯依して念佛行者也云々。天正年中常陵介高重迄相續して此に居る。

○山上故城　足利太郎俊綱の弟・五郎高綱居于此、其子山上太郎高光より（東鑑に見ゆ。）代々相續て上野八家の一也、永祿の比、山上藤七郎氏秀、小田原の爲に落城して後道及と云々。（入道して道及と云、世に馬術の達人とす）東鑑曰、治承五年閏二月足利又太郎忠綱、雖レ令二同レ意于義廣一、（志田先生義廣也。）悔二先非一恥二後勘一、潛籠二上野國山上ノ郷龍奥一、招二郎從桐生六郎許一、數日蟄居、遂隨二桐生之諫一、赴二西國一云々○元亭釋書云、釋行仙、從二靜道法師一學二密教一、旁修二念佛三昧一、居二上野之山上一、弘安元年秋受二徽恙一、端坐如二入定一而化、時紫雲掛二庵前竹苑一、如レ曝二紫衣一、又異香充二滿天外一、闍毗後得二舍利一云々。

○善故城（今勝に作る）　三善氏爰に居る、天文年中善彌四郎康道、同備中守宗次抔見ゆ、元龜三年六月、瀧川横瀨の爲に攻られて善城廢す。

○深澤故壘は　芥澤氏居る、黒川山中の芥澤氏・松島氏は奥州安倍の裔也と云、そのかみ天喜五年賴義奥州俘囚宗任が一族を連れて上洛し給ふに、彼從類七百人餘、跡をしたひて上りしを、大勢は都に憚ありとて此山中に置かれしといへり。天文の比、芥澤能登助入道道伴●松島式部入道古柏・同尾張守・東宮民部・高草木對馬・荒蒔式部等を桐生に屬して桐生七騎といふ。

新田山　小新田山

萬葉十四　にゐたやまねにはつかなくわによそりはしなるこらしあやにかなしも

夫木　つけやらは妹やとかめん新田山岩根のまくら誰にかはすと

按に新田郡ににゐた山、上中下の三つにわかつ、皆山田の郡地に入る是乎、然れど新田と行程しばらく隔てり、哥意を思ふに、今の金山など、よく其意に叶へるなるべし。

毛流山

萬葉十四　しらとほふをにひたやまのもるやまのうらかれせなととこはにもかも

今此に新田郡成塚村より官道を東へ行けば、南に金山あり、北に吉澤山あつて、むかひに圓滿なる峯あり、土人丸山と云、彼山の下回を廻れば丸山宿に至る、是を毛流山と詠たるものなるべし。（マルのマとモは同音にて宋美武女毛なり）

枝の池

名　寄　秋風に吹しかれたる島松のえたの池にや浪のこゆらん

春雨抄、えたの池上野とす、拠其地いまだ詳ならず、正字英多（エタ）又江田などもかくべし、茲に江田村上中下を分ち三むら有り、（太平記に江田・大江田黨武功有り、按に英多赤群馬郡にも有ていまだ定めがたし。又松枝也ともいふ。）是らやその地也ともいふべき

○源朝臣義國公　任式部大輔、（八幡太郎義家三男、母は足利佐太郎太夫基綱之女也、近衛院久安六年庚午往二下野國一、老二居足利別業一云々。嫡子義重、居二上野新田一、二子義康居二足利一、子孫本國及諸國に蕃莚云

々。所謂　新田・足利・古河・堀越・尾張・斯波・細川・上地・村上・畠山・仁木・豊島・矢田・戸賀島・荒川・吉良・今川・關口・入野・本田・澁川・石堂・一色・上野・小俣・加古・師・山名・大館・堀口・今井・一井・脇屋・里見・田中・竹林・中澤・大島・鳥山・大井田・太田・桃井・岩松・村田・得川・世良田・額田・江田等の祖とす。

○**新田義貞**　八幡太郎十代・新田二郎氏光之一男也云々。一說に朝氏の子と云　元弘三年起二義兵一攻二鎌倉一、以下亡三北條高時一家一之功一、任二左兵衛督一、給二上野播磨兩國一、建武二年關東征代、爲二大將軍一、後任二左中將一、同四年於二越前足羽一戰死。三子は越後守義顯・左兵衛佐義興・武藏守義宗。○脇屋義助　義貞之弟也、任二刑部卿一、昇殿、曆應三年五月、於四國疫死云々。○執事　舟田入道義昌　多田滿仲十四代之孫也。

○**金山故城**　由良成繁居二于此一、天正年中長尾顯長と共に小田原に參勤の處、止られて歸らず、後下總に移されて城廢す。この山松茸を名產とす、土人三ツ葵の形なる紋すはれるといふは、たゞ其かたちたま〳〵似たる物なるべし。献上にて土人の入る事を禁ずとなん

○**長樂寺**　稱世良田山　今世天台宗　大同二年の草創也とかや、天台・禪・密の三宗にて、新田世良田墳墓の地也。元亨釋書云、釋榮朝は建仁寺の榮西に隨て宗門の要旨をうけ、上野國長樂禪苑に居て、盛に眞乘の化導をあげらる、東方の道俗其化に進む事、吾宅に歸するが如しと云々。

○**大光院**　義重山と號す　齋田三百石淨土檀林　金山の麓に有り、東照大權現の御代に贈官有て御建立也、駿府故事錄云慶長六年辛亥十一月九日、增上寺國師被レ赴二新田一、是御先祖義重、贈二宦鎭守將軍一給則於二彼地一、新田代々御菩提所所可レ在二御建立一之可レ然地形有レ之否可二聞食一故也、土井大炊介・成瀨集人正・被二相添一云々。同十三日今夜增上寺國師及成瀨集人正・土井大炊介自二新田一歸參申言、於二彼地一義重・義貞・菩提所之舊跡在レ之云々、御氣色快然云々。

○按に新田庄は元上西門院の御料なるを、義重に庄官たるべき由勅命有しとかや、夫よりこのかた彼支族此地に據りしものなるべし。

○**青蓮寺**　齋田二十石　淨土宗　佛手山と號す、畠山遠江守義純の建立也とかや、義純は足利上總介義兼の男也、母は畠山重忠の後室也といふ。太平記に青蓮寺左近といふもの見ゆ

○**園田館**　園田は藤原氏、其先秀鄕三代鎭守府將軍兼光より出て、四代足利成行が二男七郎成實園田と號す其子園田太郎成澄・其子二郎成基が二男俊基は任二淡路守一、其子義俊と相續す。又成基が嫡子園田太郎は法然上人に歸依し、正治二年十月十一日出家して上人に給仕す云々。其後東國に歸て酒長の御厨小倉村に庵を結び一心に彌陀を念ず、時の人小倉の上人といふとかや、西明寺禪門の時より〳〵小倉の草菴へ尋ねらるゝに、或時栗の木の杖を禪門へ贈らるゝに、栗の木の老樂の行すゑかねておもふにはつく〳〵うれし栗の木の杖　是上人尊の大意也

和名鈔邑樂郡鄕名四

池田伊岐太　疋田比木太　八田也太　長柄

○池田　廢る、思ふに今の寺田・阪田の兩村有て、其、其西に古海の地名見ゆ、此邊彼廢鄕ともいふべきか。

○疋田　未詳、是又方例を押に、今の館林の北東其地なるべし、早川田岡野等の名もあれば也。猶方土の人の補を待つ○八田　按に今矢島村見ゆる、是矢田部の鄕の遺れるなるべし。八田・矢田は同じきこと多く、矢島の南に大佐貫有り、是佐貫庄なるべし○長柄　廢て小泉有り、此地に長良神祠あり、傳て藤原長良を祭るといふ、恐らくは夫より上古猶此地に鎭座の神在しもの成べし、今長柄の鄕名是なるべければ也當郡地名は　田部・池田・引田・中野等、戶なるべし。岡野は岡谷・板倉は生倉（イクラ）・秋妻は朝妻・伊谷田は伊與部の連等なるべし。鍋谷は平の義（ナラス）、浮戶・古戶・瀨戶井のたぐひは水口（ミナト）の水門（カハタチ）に出たるものなるべし。

可保夜沼　貌婢崎（カホヨノ）

萬葉十四　上つけのかほやが沼のいはぬつらひかはぬれつゝあをなたえかね

金葉　東路のかほやか沼の牡若春をこめても唉にけるかな

又堀河　按に、かほやが沼未詳、今茲に大沼四ッ有り、その中に大輪沼有り、東に今谷、北に萱野、西に須賀・川俣等の名有り、是らや其地なるべし。

修理大夫顯季

夫　木　唉包ふかほよの崎の女郎花たれかはみにや尋こさらん
思ふにかほよと云、かほやといふ同音なり。扨この歌も又同所をさすものなるべし。　忠　際

伊奈良の沼

萬葉十四　かみつけのいならの沼のおほゐぐさよそにや戀ん袖はくつとも　順　德　院
夫　木　あふことはいならの沼のおほゐ草よそに見しよはいまこそまされ
伊ならの沼　未詳、今多々良沼・伊太久良沼有り、是伊ならの轉じたるものにや、扨二ッの沼、何れか定かたし。

大荒木杜

古　今　大あらきの杜の下草老ぬれど駒もすさまず刈人もなし　讀人不知
哥書に、大荒木の杜、山城とす。今古說に、大荒木の杜、當郡に有といふもの、尤信用しがたしといへども、暫く其說によるに、邑樂は上卷にもいふ如く大海の義也、此地上古水海也と見えて、大沼あまた有り又古海・古戸・江戸・浮戸・須賀・大島等の地名、其他長柄・池田の郷名抔、皆水邊に出たる尤多し、去れば大荒木は大海木にて、木は助語也、扨彼歌の說、爰に起しものなるべし。

○須賀の地名　此地川俣邊有り、利根川を隔て武藏に新郷と云又須賀の名有、　是水邊の名に出て洲濱の義なるべし、譬ば信濃に諏方の郡有が如し、其東は大輪沼有れば也、大輪沼是大神の義にや、大神は按に大蛇成べし、今館林善導寺の池中龍燈見ゆ抔いふ、俗說ながら誣ゆべからず、池と云じが姓氏錄に大神朝臣は大國主之後也、初大國主神、娶二三島溝杭耳之女一、夜未レ曙去、不二會書到一、於レ是女績苧係レ衣、至レ明隨レ苧尋覓、經二於茅渟縣陶邑一、直指二大和國御諸山一、還視レ苧遺唯有二三蔕一云々。因て大神をオホミワケと訓む、是世にいふ大蛇の靈なるべし。

○佐貫庄　今大貫村存　佐貫は藤原氏、持節征東大使藤原小黒麻呂の後裔也と云傳ふ。佐貫系譜に據に、秀鄕の五男左衛尉千常の後裔、淵名大夫兼行が二男行房、上野國に住して左貫六郎と云、其子成綱・其子成光・其子太郎重光・其子彌太郎廣光が子、佐貫四郎大夫右衛門尉廣綱、右大將賴朝の御家人となり、壽永年中判官義經に隨て、度々武功を顯すといふ。

○館林故城　赤井山城守照景居二于此一、其先佐貫氏より出て、世々本郡の住人也、照景死して其子文六幼少也、家臣大袋領主諸野因幡が叛逆に因て赤井氏亡、是より新田金山の長尾顯長茲に移住す、金山を弟由良成繁に讓る、天正十八年館林落城と云也。

○小泉故城　延德年中富岡主稅介直光居、結城中務大輔直朝の裔也、其子玄蕃允秀光・其子主稅頭秀信・武功を以て二十一村を打隨ふ、其子六郎四郎秀親戰死して子幼少也、依て下野國小山判官高朝の子、彦三郎重朝を以て相續す、對馬守秀高と改め、小田原に屬す、天正十八年小泉亡（僕、正忠に至て八代の祖也）○木戸村には木戸伊豆守入道元齊居之、足利持氏の臣駿河守持秀の後也、金山に屬す、有二武名一、後仕二上杉鎌信一云々。○長栖神祠　小泉村に有り、所祭未詳、傳て藤原長良を祭と云、長良は左大臣冬嗣の男、良房の兄也、從二位中納言、齋衡三年七月薨、贈大政大臣正二位、三男基經嗣二叔父良房家一云々。（長良、上野國司となりし事未詳、按に夫より先猶此神祠ありしにや）

○渡瀨川は　源勢多郡深澤より出て、山田の中央を下り、是に又桐生川を交じへて東方下野を境ひ、武藏に至て利根川に入る、利根川も又西の方武藏國中瀨・川俣等の渡を帶て、梅原・江口・飯野・大久保等を過て、武藏・下總に續く尤大河とす。

○宇治拾遺物語に、今はむかし河內守賴信、上野守にてありしとき、坂東に平忠恒といふ兵ありき、仰らるゝ事なきが如くにする、うたんとて多くの軍おこして、かれが住家の方へ行むかふに、入海のはるかにさし入りたる向に、家をつくりてゐたる、この入海廻るものならば七八日にめぐるべし、直ぐに渡らばその日の中にせめつべければ、忠恒わたるべきやうもなし、さればわたるべき舟ともをみなとりかくしけり、濱はたに打立て、この濱のまゝにめぐるべきにこそあれと云々。上野守のいふやう、此海のまゝに廻りてよせば日比へなん、その間ににげもし、又寄られぬかまへもせられなん、けふのうちによせて攻めんこそあのやつは存外にしてあはてまどはんすらん（略）賴信つゞきてわたさんとて、馬をかきはやめて寄ければ

道知りたるものにや有けん、四五騎ばかり馬を海に打下して、たゞわたりにわたりければ、それにつきて五六百騎斗りの軍どもわたしけり云々。按に利根川の末を渡したるものなるべし。

六百番歌合 諸聲にいたくな鳴そさもこそは浮田の池の蛙なりとも　兼家

哥書、浮田の池、未詳ならずとす、今浮戸の名有ば、しばらく玆に記す。

追考　佐位郡は續記に、神護景雲九年三月、上野佐位郡人、外從五位上檜前老刀自、賜姓佐位朝臣云々

附租税

○延喜式、上野國正税公廨(クカヒ)各三十萬束、國分寺料五萬束、興福寺料三萬束、文殊會料二千束、藥分料一萬束、學生料一萬束、修理池溝料四萬束、救急料十二萬束、俘囚料一萬束、勅旨使御馬秣料四千七百二十束同擊飼(ツナギカヒ)御馬秣料五千九百束、占市(ウラチノ)牧牛直(アタヒ)四千三百十五束凡五十八萬六千九百三十五束　○年料別納租穀一萬七百四十五束○年料供進　細貫筵六十枚、小町筵三百枚、食筵一枚、同別貢雜物　筆一百管、零羊角六具　杏仁三斗、膠(ニカハ)十二斤、樺皮(カニワ)四張、貢蘇十三壺五口各大一升八口各小一升蘇或作レ酥、牛羊乳成レ酪、酪成レ酥、酥成二醍醐一。

○主計式貢絲　調緋帛(ツキノヒハタ)五十疋、紺帛五十疋、黃帛八十疋、橡帛十三疋、絁(アシキヌ)三百十疋、紺布五十端、縹布(ハナタ)十五端、黃布三十端、榛布(クチハ)三十五端、緋革十五張。自餘輸レ布　麻百五斤、細町席、漆・紙・紅花。

○交易雜物　絁五十疋、布一千五百端、商布(タニ)七千七百三十一段二尺二寸八分、苧八十斤、席九百枚、細貫(ホソヌキ)席六十枚、紫草(ムラサキ)二千三百斤、鹿革六十張、履料牛皮二十張、櫑子(ラメ)四合。

○年料雜藥十五種　青木香黃芩黃蓍各十斤、細辛六十斤、芍藥・當歸・各十斤、舛麻三斤二兩、防風六十斤銅牙五斤、干地黃・胡麻・蜀椒・各一斗、麥門冬八升、附子四斗、猪蹄四具。

○倭名類聚鈔云、田三萬九百卅七町百四十四步、正公各卅萬束、本穎八十八萬四千束、雜穎廿八萬四千束。

上野名跡考　終

大正十五年五月十七日印刷
大正十五年五月二十日發行

不許複製

群馬縣前橋市南曲輪町十九番地
編輯者發行者兼印刷者　豊國義孝
群馬縣前橋市竪町百壹番地
印刷所　株式會社　前橋印刷所

發行元　前橋市南曲輪町十九番地
上毛鄉土史研究會
振替口座東京五一四五一番

群馬県立図書館
0243859-6
県立
書館